遊戯王THE・STORY　『メタモルとユベルと時々私』

半生緋色

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

孤独がきっかけでデュエルから離れたデュエリストが、あるカードと出会い運命が変わっていく物語。

一度挫折したプロの道を目指して、彼は彼女はＤＵＥＬ・ＡＣＡＤＥＭＩＡ・ＵＮＩＶＥＲＳＩＴＹを目指す。

この作品は遊戯王ＴＨＥ・ＳＴＯＲＹ『ＤＵＥＬ・ＡＣＡＤＥＭＩＡ・ＵＮＩＶＥＲＳＩＴＹ』のシェアワールド作品です。

ただ、細かなところは決まっていないことがあるので、本家とは似てるけど別かもしれないパラレル世界だと思ってください。

目次

DAUS入学試験編
prologue ―― 1
入学試験 ―― 5
入学試験2 ―― 16
敗北、そして ―― 33
合格発表、それから ―― 50
幕間　私から見た陽彩さん。 ―― 70
幕間　出会い ―― 81

ＤＡＵＳ入学試験編

ｐｒｏｌｏｇｕｅ

子供のころ、私はデュエルが大好きだった。
映像で見た昔の初代決闘王に憧れて始めたデュエル。
最初は難しかったルールも回数をこなして覚え、デュエルするたびに新しい知識が入ってきた。
知らないカードを知ることができた。新しい知り合いができた。
それが楽しくて楽しくて、何時しか私はデュエルの虜になっていた。
…今思うと子供ながらに、よく覚えられたものだと思わなくもないが、そこはきっとそれぐらいデュエルが大好きだったのだろう。
そんな子供時代を送っていたのだから、将来の夢がプロデュエリストになるのは自然のことで、私も本気でその道に進もうと様々な努力をした。
過去の有名デュエリストのデュエル内容を調べたり、迷信かもしれないがドローの練習もしたり…。
あの頃は近くのパン屋さんで売っていたドローパンの食べ過ぎで少し太ったのもいい思い出だ。
ただ、その努力の結果なのか、私は自分のある一つの才能に気が付いた。
それは、ある特定のカードを引き込む力。
才能というよりも呪いに近いかもしれないそれを使いこなすために、私はそのカードに特化したデッキ作りを始めた。
それが、きっと一番の間違いだったのだろう。
…そのカードがもし、他の人が使うようなバトルに強いようなエースモンスターだったのなら、少しはこの後の結果が変わったのかもしれないけど。
でも、私はそのカードが大好きだったから仕方がない。
そこから私は人とは違うデュエルに突き進んでいった。

目指していたデュエルアカデミアには無事合格。
入学試験で調子に乗ってしてしまったあるデュエル内容で有名になった。
…そこからはあまり思い出したくない。
私は私の期待に応えてくれるカード達の力で勝ち続けることができた。
ただ、子供の時と違いデュエルをすればするほど私の周りから人は消えていったが…
「お前とデュエルしても何も残らない」
「ワクワクもない、何をされるのかもわかってる。君は結局何がしたいんだ？」
最後まで私と一緒にいてくれた友人に最後に言われた言葉。
私はそれが耐えられなかった。
『私がしたかったデュエルはこんなことだったのかな？』
そう自分に問いかけて、何も答えを出すことができなかった私はデュエルアカデミアを去るのにそんな時間かからなかった。

それから数年過ぎた、現在
なら、今の私はどうなのだろうか？果たしてデュエルが好きなのだろうか…正直言ってわからない。
今でも私は勝ちたいだけなのか？
私のデッキにワクワクはあるのか？
今だに答えは出ていない。
そんな私が、今この場にいることを考えると笑えてくる。
受験票を片手に、じっと目の前の建物、デュエルアカデミア・ユニバーシティ通称「ＤＡＵＳ（ダウス）」その受験会場を見つめながら私は考える。
大きく開かれた門を見上げながら、その門に書かれたデュエルアカデミアという言葉に
『どの面を下げてここにいる？』

そんな風に言われた気がした。
思い出したくない思い出を更に思い出してしまう。
『君が嫌なら、別にやめても僕はいいんだよ?』
そっと隣から聞こえた私をここに戻らせた張本人の声に、はぁ…とため息を一つ。
それで本当に困るのは自分なのに、いたずらっぽくそう言う彼(仮)に私は小さく首を振る。
私はこの数年の間に、答えは出てないけど彼と出会って一つだけある目標ができた。
その為には、もう一度あの場所を目指すのが一番の近道なのだから。
「心配しなくても、これは私が決めたことだし。…それにさ、少しだけ楽しみでもあるんだ」
そう決意表明するように呟きながら私は止まっていた足を前に進める。
「もしかしたら、昔みたいにみんなと笑顔で楽しいデュエルができるかもしれないし…なんてね」
『かもしれないんじゃなくて、そうすればいいんじゃないかな?デュエルは本来楽しいものだって…僕は誰かに言われた気がする』
「あれ、少しは思い出してきた?やっぱりデュエリストが多いから、そのえっと…デュエルエナジーだっけ、それが会場から出てるのかなー」
『…誰かはわからないけど、とても大切な人だった気がする。忘れてはいけない…のに』
「って、ああ…試験前なのになんだか重そうな話はダメ。重いと落ちそうじゃないか!」
思わず大きな声を上げてしまったが、まあ、怪しい人に見えるだけで済むだろうし…だめだけど。
ただ彼とのそんな他愛もない話が楽しくて、私は今まで進めなかった試験場の門を自然にくぐっていた。

これは偶然の出会いから、様々な苦難を乗り越えていく一人のデュエリストの物語

入学試験

デュエルアカデミア
それは、少年少女を一流のデュエリストに育成する学校
プロデュエリストを目指す子供たちにとって、最高の環境であり、
実際多くのプロがこの学校の卒業生である。
他にもカード関連企業の就職に有利など、様々な恩恵があったりする。
…まあ、私はそこを一回やめたのだけど。
なら、デュエルアカデミア・ユニバーシティとは
様々な理由があり、デュエルアカデミアに入学できなかった者や、
アカデミア卒業後もプロの道をあきらめきれなかった者、
それとは違い研究者としてデュエルにかかわりたい者、
それらを取りまとめた一つの大きな学校である。
もちろん、運営しているのはアカデミアと同じあの会社だ。
あくまでもプロデュエリストを目指すだけではなく、
カード開発や研究、デュエルエナジーの応用など、様々な学部があり、
まさに、デュエルの総合大学のようなものである。

「…うわぁ」
門をくぐって進んだ会場の中は人でごった返していた。
会場は複数に分かれているとはいえ、さすがは一番人気のデュエリストコース。
正直受験番号から嫌な予感がしていたが、これほどとは…
何気にすごい髪形のデュエリストが何人かいるが、これは初代決闘王リスペクトなのだろう。
……うん…ちょっと、離れていよう。

これは髪形がという問題ではなく、ただあまり目立ちたくないからだから！
人混みから離れるように会場の隅に移動した私は、カバンの中から受験内容が書かれた紙とデッキを取り出す。
再度確認するように隣にいる私のパートナーと共に内容を見る。
ああ、それにしてもタテモノノスミスは落ち着くなー。タテモノノスミスはいつも私を癒してくれる…

ＤＡＵＳデュエリストコース入学試験内容は筆記試験、面接、試験デュエルの三つである。
ここと違う別会場で行われた筆記試験、面接の二つはすんなり乗り越えた。
問題は試験官とのデュエルである。正直私はデュエルから離れてここに至るまでちゃんとしたデュエルは数えるほどしかしていない。
『まあ、君なら大丈夫じゃないかな？いい趣味をしたデッキだし、何より僕もいるんだから』
いい趣味ってどういうことかな？なんて、問いただしたくなるが今は人の目があるので声は上げず、じっと隣を見つめるだけで済ます。
まあ、これもきっと彼（仮）なりの励ましなのだろう。
…きっと、たぶん、おそらく、めいびー。
気を取り直して辺りを伺う。
いくつかのデュエルフィールドで、すでに順番が早い受験者がデュエルをしている。
試験デュエルはＬＰ４０００、先行ドローのスタンダードなもの。
ただ、相手の対応力を見るためなのか試験官が基本的に先攻である。
試験官の使用デッキはフィールドによって違うようで、遠くでは儀式モンスターを使っている試験官の姿も見える……儀式？
さすが試験というべきか、戦う前に相手のデッキがわからないようにはしているのだろう。
番号が呼ばれる直前までどのデュエルフィールドで戦うのかはわ

からないようだ。
　なら、いろいろ考えるよりも自分のデッキを信じて試験を受けるだけだ。
「それにしても儀式デッキか～。…戦ったことないから戦いたいな」
『なら、受験票すり替えてみる？』
「それは魅力的…。いや、駄目だから！」
　思わず出した声にさすがに周りの視線が集まる。あ、はい、すみません…。
　あ、距離をとるのはやめてください。私のトラウマが…
　周りから見たら私は独り言をつぶやく不審者なのだから仕方がないとはいえつらいものがある。
　それにしても、こういう場に来て改めて実感する。根本的に私はデュエルが大好きなのだろう。戦いたいという戦意だけがふつふつと湧き上がる。
　そうしているうちに、
『受験番号１１９２番、藍沢陽彩（あいざわひいろ）…５番デュエルフィールドへ』
　…さて、どうやら次は私の番みたいだ。
　受験番号を呼ばれ、指定されたデュエルスペースに移動する。
　既に待機していた試験官に小さく礼をすれば、不正対策なのだろう試験用のデュエルディスクを受け取る。
　懐かしいずっしりとした重みを腕に感じつつ、私は過去から生まれ変わったデッキをディスクにセットする。
「みんな、ごめん。それと頼りにしてるから」
　そっとデッキを撫でれば、小さくつぶやく。
「では、準備ができ次第開始する。何か質問はあるか？」
「あ、えっと…特にないですハイ」
「ならば、所定の位置につき、デュエル開始の宣言をする」
　コクリともう一度私は一礼し、所定の位置につけば私は試験官に合わせるように久しぶりにあの言葉を口にする。
「「デュエル!!」」

試験官　　ＬＰ４０００
藍沢陽彩　ＬＰ４０００

「先攻は私だ。ドロー！」
開始の合図と共に、試験官がドローする。
昔通っていたデュエルアカデミアは、なかなかキャラの濃い先生方が試験官をしていたのを思い出し、語尾に何かつけないのかな？なんて期待をしていたが、どうやら普通らしい。
自身もその間手札を確認すれば、子供のころからいつも私の手札に来てくれるカードが一枚
「…うん、私はまだ嫌われてないみたいだ」
手札に来たあるモンスターに思わず笑みを浮かべる。
『僕もいるのになー』
なんだか耳もとで何かが聞こえた気がするが、今はデュエルに集中しよう。
「…試験中によそ見をするとはいい度胸だ。だが、そんな余裕をいつまで持っていられるかな？私は手札からフィールド魔法《歯車街（ギア・タウン）》を発動する」
ディスクにカードが置かれた瞬間、あたり一面が歯車だらけの街のフィールドエフェクトに包まれる。がちがちと歯車が回る音が聞こえるその街は、過去にアカデミアで見たことがあるカード。
この効果は知っている。確か古代の歯車のリリースを一体少なくできる効果と、もう一つは…
「さらに、自身のフィールドにモンスターが存在しないとき、自分の場の表側表示のカードを破壊し、このカードを発動できる。マジックカード《古代の機械射出機（アンティーク・ギアカタパルト）》」
「…ん？」
《歯車街（ギア・タウン）》
フィールド魔法
（1）：このカードがフィールドゾーンに存在する限り、
お互いのプレイヤーは「アンティーク・ギア」モンスターを召喚す

る場合に
必要なリリースを1体少なくできる。
（2）：このカードが破壊され墓地へ送られた時に発動できる。
自分の手札・デッキ・墓地から「アンティーク・ギア」モンスター1体を選んで特殊召喚する。
≪古代の機械射出機（アンティーク・ギアカタパルト）≫
通常魔法
「古代の機械射出機」の（1）（2）の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。
（1）：自分フィールドにモンスターが存在しない場合、
自分フィールドの表側表示のカード1枚を対象として発動できる。
そのカードを破壊し、デッキから「アンティーク・ギア」モンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する。
（2）：墓地のこのカードを除外し、自分フィールドの表側表示のカード1枚を対象として発動できる。
そのカードを破壊し、自分フィールドに「古代の歯車トークン」（機械族・地・星1・攻／守0）1体を特殊召喚する。

宣言と共に辺り一面を爆音とともに土煙が舞う。
現れたと思った歯車の街は、一瞬にして彼方から放たれた砲弾によって廃墟となった。
その廃墟には大きな影が二つ…なんだろう、とても嫌な予感がするぞ。　一つは私の想像通りならあれだけど…なんでもう一体？
不思議そうにその影を眺めていた私に対し、試験官が丁寧に言葉を続ける。
「破壊された≪歯車街（ギア・タウン）≫の効果で、私はデッキから≪古代の機械巨竜（アンティーク・ギアガジェルドラゴン）≫を特殊召喚。さらに≪古代の機械射出機（アンティーク・ギアカタパルト）≫の効果で、デッキから≪古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）≫を召喚条件を無視して特殊召喚する。…また墓地の≪古代の機械射出機（アンティーク・ギアカタパルト）≫を除外することで、自分フィールドのカードを破壊し、古代の歯車トークンを出す効果もある」

土煙が晴れて現れた二体のモンスターの存在感に実体がないとはわかっていても少し圧倒される。機械の巨人と機械の竜…うん、これは殺意が高いな。
それに何だろうあのカード…？そもそも古代の機械なんて、アカデミアの一部の人しか持ってないカードなのに、新規で作られたカード？
カードの効果は適用時のみ説明される。それはデュエルの進行を妨げないためであるし、デュエリストの実力はその未知のカードに対する対応力も加味されているからだ。それ故に基本的にデュエルで公開情報がないのは常識だ。
逆に言えば効果で手札に加えるカードが宣言する必要はない。サーチ効果外のカードのサーチなど違反した場合はデュエルディスクが処理してくれる。
それゆえに墓地での効果を説明してくれるのはあくまでもこれが入学試験故にだろう。
しかし、一般には流通しないような専用カード、それを入学試験で使ってくるとは…
色々言いたいことがあるが、とりあえずこれは言っても問題ないだろう。
「…それ少し大人げない気がします」
あ、試験官視線をそらした。ずるい
ただ、本来なら先攻でここまで展開する必要はないはず。なら、これも試験の判断基準のうちの一つ。
この程度の困難は対応して当然ということなのだろうか？
「…私はカードを2枚セットし、ターンエンドだ！さあ、この場面どう対応する？」
それを証明するかのように、試験官はこちらをうかがうように薄く笑みを浮かべて声をかけてくる。
試験官
ＬＰ４０００
手札２枚

セットカード２枚
モンスター
《古代の機械巨竜》（アンティーク・ギアガジェルドラゴン）　ＡＴＫ３０００
《古代の機械巨人》（アンティーク・ギアゴーレム）　ＡＴＫ３０００

「私の…ターン。ドロー!!」
少し言い淀んだが気合と共にデッキからカードを一枚ドローする。
気合は大事だ。少なくとも弱気な時よりもいいカードは絶対に引ける。
引き当てたカードを見れば、こちらを見ている試験官ににっこり微笑み返す。
「私はモンスターをセット。さらにカードを二枚セットし…」
「こちらの古代の機械は、攻撃宣言時相手の魔法トラップは発動できない。さらにゴーレムは貫通ダメージを与える。それをわかってこの布陣なら…」
「さらに、手札からマジック発動！《太陽の書》！私はセットした自分のモンスターを選択。表側攻撃表示になるのは…《メタモルポッド》!!」
「《メタモルポッド》だと？だが、手札を補充したところで攻撃力が低い弱小モンスターを残すのは…」
表側表示になる私のフェイバリットカード、《メタモルポッド》
いついかなる時も私の初手に来てくれる、瞳の素敵なナイスガイ（？）
メタモルポッドさんだけは、いついかなる時も私のことを裏切らない。
あらゆるデッキに投入可能な素敵モンスターである。
さらに、相手と自分の手札をすべて捨てさせドローさせてくれる。
昔、相手のデッキを、カードを知りたいと願った私にとって願ってもない効果であった。
それに特化した私のデッキはここからが違う。
「私はリバースした《メタモルポッド》の効果にチェーンして、手札か

ら月の書を発動。《メタモルポッド》を裏側守備に表示変更。そして、手札をすべて捨て、５枚ドローする」
お互いにカードをドローし、手札を確認すれば試験官が苦々しい表情でこちらを見ている。
うん、その表情嫌いじゃない。なんて思った私はやっぱりどこか性格が悪いのだろう。
「…効果を使いまわす…だけでは済まなさそうだな」
「もちろん。このままあなたのデッキを丸裸にしつつ、続く受験者に情報を渡してあげようかな…なんて？」
「君も十分大人げない気がするが…」
私はそっと試験官から目をそらした。
それにしても…ああ、やっぱり試験官の驚いた顔、他の受験者の顔がたまらない。
やっぱり初手《メタモルポッド》さんは楽しい。
決まった時のドッキリ感は十分エンタメになると思うのにな―。
ただ、この楽しさはあくまで大部分は私だけのもの。
「私は伏せていた《魔法石の採掘》発動。手札を二枚捨て、墓地の太陽の書を回収。もう一度カードを一枚伏せ《太陽の書》を再度発動。《メタモルポッド》を表側にして、チェーン。今度は《皆既日食の書》」
私は慣れた手順で再度メタモルポッドの効果を発動する。
いつか誰かが言っていた。デッキ破壊は『恥ずべき戦い方』らしい。
子供時代なら許されたが、ここはあくまでＤＡＵＳ…
プロデュエリストになるには人を魅せれるデュエルをしなければいけない。
なら、ここからの展開は相手の予想を裏切らないといけないかな。
そう思いドローした手札を確認していると、私の動きを聞きつけたのか、このデュエルを見ているギャラリーが増え始めている。
「おいおい、入学試験で試験官にデッキ破壊で挑ん出るやつがいるぜ？」
「まさか、プロデュエリストを目指す奴がそんなことしないだろう？」
「でも、昔一人だけアカデミアの入学試験でデッキデス勝利したやつ

がいるらしいぜ？」
ギャラリーから聞こえた言葉に、心が抉られる。
すいませんそれ私です。しかもそれで勘違いして調子に乗りました。
「評判通りか…しかし、外野の声に惑わされるな。君が見せたいデュエルを魅せればいい」
不意に聞こえた声にそちらをむけば、微笑む試験官の姿。
あ、なんだろう…心配してくれているのだろうか？
こんな時にやさしい言葉かけられると試験官さんが男前に見える不思議……私の勘が言っている、まず間違いなくいい人だ。
って、違うぞ。デッキ破壊相手にある程度余裕の表情を浮かべられるというのはなかなか不気味だ。というか、評判って何のことだろう？……これはきっと、何か対策があるに違いない。
「…私はさらにカードを2枚セット、手札より《王家の神殿》を発動！」
《王家の神殿》
永続魔法
「王家の神殿」の（1）（2）の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。
（1）：自分は罠カード1枚をセットしたターンに発動できる。
（2）：自分フィールドの表側表示の「聖獣セルケト」1体と
このカードを墓地へ送ってこの効果を発動できる。
手札・デッキのモンスター1体または
エクストラデッキの融合モンスター1体を特殊召喚する。
発動したのは昔決闘王を決める大会で、あるデュエリストが使ったカード…の調整版である。
オリジナルはフィールド魔法なのだが、それを一般流通用に効果を調整されたカード。
フィールド魔法ほど大きなヴィジョンは出てこないが、壊された街の瓦礫の中から現れる古代エジプトの神殿というのはなかなか不思議な光景である。
因みに私は墓守の一族とかそういった特殊な家系ではなく、一般人

です。
…今は色々あって一般人かはわからないけど。
「なかなか変わったカードを使う…」
「みんなが知っているカードより、こういうカードの方がワクワク感があるでしょう?まあ、私の戦術はたぶん知っての通り異端ですから。それじゃあ、デッキの回転を上げていきますよー」
そう楽しそうに宣言しながら、デュエルディスクを操作し考える。
ここまで相手が反応してこないということは、あの伏せカードは攻撃反応系なのだろう。もしくはまだタイミングを待っているか。
前者ならいいのだけど、後者だとかなり厄介な相手だ…。
「私は《王家の神殿》の効果で今伏せたトラップカードを発動!《硫酸のたまった落とし穴》。私は裏側守備表示になっている《メタモルポッド》を選択!」
裏側守備になったメタモルさんが表側表示になって硫酸に落ちていく…。
壺の中から断末魔が聞こえるが、仕方がないじゃないか、これも私の愛の形なのだから。
「リバースした墓地のメタモルポッドの効果発動。お互い再度手札を墓地に捨て、5枚ドロー。いいカードは引けましたか?」
私はちょっと煽るように声をかける。悪戯心もあるが私のデッキとしては、次のターン全力で私を潰しに来るように。
そのために今は嫌われてもいいから挑発する。
それにギャラリーもいるし、盛り上げた方がいいだろう。
「なかなかいい挑発だ。だが、君は墓地が肥えることの危険性はわかっているのかな?」
「もちろん。でも、それはお互い様でしょう?」
なんて言っているが、実際怖いです。墓地は第二の手札なんて言われているし、墓地利用に特化したデッキなら返しのターン、私の布石を防ぎきってライフは削りきられるだろう。
だが、試験官のデッキはたぶん古代の機械。そこまでそういったカードはないはずだ。

「…私は手札より、魔法カード《浅すぎた墓穴》を発動。お互いに墓地からモンスターをセットする」
私はデュエルディスクを操作し、あるカードを墓穴の効果でセットする。試験官も墓地から一枚少し考えながらもセットしている。
「手札から更にカードを1枚セットこれで私は…」
さあ、私の布石はここまでだ。うまくカードを全部埋めれた。これで次のターン…決着がつけばいいな。
そう思って私はターンエンドを宣言しようとしたとき。
「セットしていたマジックカード発動。《ツインツイスター》。手札を一枚捨て、君の《王家の神殿》と、そうだな…三枚目に伏せたカードを破壊する」
そのカードの発動によって私の思惑はあっけなく砕かれたのであった。

藍沢陽彩
ＬＰ４０００
手札３枚
セットカード３枚
セットモンスター１枚

試験官
ＬＰ４０００
手札６枚
セットカード１枚
モンスター
《古代の機械巨竜（アンティーク・ギアガジェルドラゴン）》　ＡＴＫ３０００
《古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）》　ＡＴＫ３０００
セットモンスター１体

入学試験２

「藍沢（あいざわ）」の噂は昔聞いたことがある。
というよりも、教師をしていれば自然と優秀な素質のある生徒の情報は集めてしまうものだ。
特にデッキ破壊で入学試験を突破した有名人の情報なら集める必要すらなく耳には入る。
その子は異様に「そういった」カードに好かれていた。
入学と同時に着々と頭角を現し、戦うたびにそのデッキの精度や展開のスピードが上がっていった。
当然有名になればそのデッキ内容は噂になり、おのずとその子に対するメタデッキを使うものも出てきた。
デッキ枚数を増やすもの、墓地利用に特化したもの、暗黒界、その子は様々なデッキと戦って、そして負けた。
それもそうだ、一つの特殊な勝利方法に特化するということは、それを潰されてしまえば、もはや何もできない。
汎用性の高いカードであらゆる展開に対応できる、所謂王道デッキとは正反対の戦略。
ただ、その子はメタデッキを使われ、無残に負けるその度に嬉しそうにそれに対抗したデッキを作り上げてきた。
デッキ破壊が駄目ならメタポで手札を補充しつつのチェーンバーンや墓地を肥やしてのマジカルエクスプロージョン、はっきり言ってピーキーなデッキばかりだ。
それを回しきる実力があるのなら、所謂「普通」のデッキを使っても戦えていただろう。
変わった戦いをするため、色々なカードを工夫してデッキを作っていた。
それだけ聞いてもデュエルが大好きなのは間違いなかった。
だが、その藍沢がアカデミアをやめたと聞いて当時の私は驚いたものだ。
それが、私の知る藍沢という［女の子］のこと。

そんな「藍沢」を名乗る相手が目の前にいる。
彼はかなり小柄で中性的に見えるが、間違いなく女ではない。
あまり人に素肌をさらしたくないのか、黒いだぼだぼな服にパーカーを被ってはいるが、隙間から覗くその喉元には喉仏がきっちり出ている。
ならば、おのずと別人ということになるが…少なくとも戦法、デッキ内容は噂通り「藍沢」のものだろう。
なら油断できる相手ではない。
そう思いエンドフェイズにツインツイスターでカードを二枚破壊した
だが破壊したカードを確認して違和感を覚える。
一枚は、デッキ回転のエンジンだろう≪王家の神殿≫、これは効果を使う前に破壊してもよかったが、あの場面の手札なら捨てておいた方がいいと判断。どうせ破壊してもエンドフェイズには伏せを５枚そろえてきただろう。
なら、エンドフェイズに破壊しておいた方が伏せを増やされるよりはいいだろうと。
だが、もう一枚破壊した伏せを見て少し違和感を覚える。
≪バトルマニア≫
なぜバトルマニアなんて入る余地がある？
「いいカードを破壊したようだな」
相手の反応を伺うように鎌をかける。
「…べ、別に、そんなカードなくても、次の私のターンが回ってきたらあなたのデッキをこのメタモルで丸裸にして見せますよ」
だからと言って目に見えるほどの動揺はどうかと思うが。
相手のデッキは相手の動きから遊びがなく何かに特化していると考えるのが筋だ。
なら、バトルマニアを入れなければいけない何かが其処にあるということ。
破壊されて明らかに動揺している相手の表情を見れば、それは次のターン発動する予定だったカードということ。

ということは…
あの特殊召喚したカードは≪メタモルポッド≫ではないな。
少なくともあれが≪メタモルポッド≫なら、発動すれば貫通ダメージは避けられない。というより、バトルマニアを使う利点がない。
つまり、相手は古代の機械（アンティーク・ギア）モンスターの攻撃を耐えてこちらに反撃できるモンスターを伏せたということ。
「…デッキ枚数も心もとないですよ？迷っていたらこのまま押し切らせてもらいます」
こちらの思考を読んだかのようにかけられる声に苦笑が漏れる。
「私のターン、ドロー！」

藍沢陽彩
ＬＰ４０００
手札３枚
セットカード３枚
セットモンスター１枚

試験官
ＬＰ４０００
手札７枚
セットカード１枚
モンスター
≪古代の機械巨竜（アンティーク・ギアガジェルドラゴン）≫　ＡＴＫ／３０００
≪古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）≫　ＡＴＫ／３０００
セットモンスター１体

カードをドローし、相手の場を確認する。
手札はこれで７枚、墓地も肥え、よほどのことがない限り突破は可能だろう。
…いや、深く考えまい。今は全力で相手に当たるだけ。
「私は手札より、永続魔法≪古代の機械要塞（アンティーク・ギアフォートレス）≫を発動！更に君のカードでセットした≪古代の機械猟犬（アンティーク・ギアハウンドドック）≫を反転召喚！効果を発動する」
「ん、また知らないカード…」

「手札の《古代の機械兵士（アンティーク・ギアソルジャー）》と場の《古代の機械猟犬（アンティーク・ギアハウンドドッグ）》を融合！いにしえの魂受け継がれし機械仕掛けの猟犬よ。機械仕掛けの兵士よ。今、隊列を組み交じり合い、新たな力とともに生まれ変わらん！融合召喚！現れろ！レベル８！機械仕掛けの魔神！《古代の機械魔神（アンティーク・ギアデビル）》！」

《古代の機械猟犬（アンティーク・ギアハウンドドッグ）》

効果モンスター

星３／地属性／機械族／攻１０００／守１０００

（１）：このカードが召喚に成功した場合に発動する。

相手に６００ダメージを与える。

（２）：このカードが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

（３）：１ターンに１度、自分メインフェイズに発動できる。

自分の手札・フィールドから、

「アンティーク・ギア」融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、

その融合モンスター１体をエクストラデッキから融合召喚する。

《古代の機械魔神（アンティーク・ギアデビル）》

融合・効果モンスター

星８／地属性／機械族／攻１０００／守１８００

「アンティーク・ギア」モンスター×２

「古代の機械魔神」の（２）の効果は１ターンに１度しか使用できない。

（１）：このカードは他のカードの効果を受けない。

（２）：自分メインフェイズに発動できる。

相手に１０００ダメージを与える。

（３）：このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「アンティーク・ギア」モンスター１体を召喚条件を無視して特殊召喚する。

廃墟の地下からソリッドヴィジョンで現れた要塞の上、融合召喚された砲手のようなモンスターが仁王立ちする。ステータスだけ見れば弱小モンスターにすぎないが、その能力はデビルの名前に負けず凶悪なものだ。
「≪古代の機械猟犬（アンティーク・ギアハウンドドッグ）≫は融合カードなしで「アンティーク・ギア」融合モンスターを特殊召喚できる。さらに特殊召喚した≪古代の機械魔神（アンティーク・ギアデビル）≫の効果発動。１ターンに一度、相手に１０００のダメージを与える」
宣言と共に放たれた砲撃、それは相手の姿を打ち抜き…
藍沢陽彩　ＬＰ４０００→３０００
「つく…、って、とんでもない効果じゃないですか！しかも除去しないと毎ターンって…」
「お互い様だろう。そちらもデッキデスを使っているんだ。ああ、それと補足するが≪古代の機械要塞（アンティーク・ギアフォートレス）≫が場に存在するとき、召喚、特殊召喚されたターン「アンティーク・ギア」モンスターは相手の効果の対象にならず、相手の効果では破壊されない。また「アンティーク・ギア」カードの効果の発動に対して、相手は魔法・罠・モンスターの効果を発動できない。まあ、君はデッキを破壊しきるのだから関係のない効果か…」
「うう、嫌みですか！いや、まあ…うん、最善手なんでしょうけど。最初とは違い…今からが本気ということですか」
「本気かどうかはこれからの動きで君が判断すればいい。続けていくぞ」
そう軽く相手に返しながらも、少し感心する。気づいているのだろう、やろうと思えば先攻1ターン目で使ったカードだけでも現状以上の場を整えることはできた。
それをしなかったのは相手の実力を図るためであったのだが。
しかし、今は違う。出し惜しみをすればやられる。元より相手のメタモルが効果を使うなら手札を余らせたところで墓地へ送られるだけだ。

ならば、さらなる攻撃の布陣を。
…今だけは試験官としてではなく、一人のデュエリストとして本気でぶつかろう。
それに、出せる全力をぶつけた方がきっと彼も楽しめるだろう。
「続けて私は手札の《パワーボンド》を発動！フィールドの《古代の機械巨竜（アンティーク・ギアガジェルドラゴン）》《古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）》手札の《古代の機械熱核竜（アンティーク・ギアリアクタードラゴン）》を融合する。いにしえの巨人よ。歯車の巨竜よ。深遠に輝ける竜よ。今ひとつとなりて絶大なる力を示せ。融合召喚！いでよ！レベル１０！《古代の機械究極巨人（アンティーク・ギアアルティメットゴーレム）》！」
要塞を守護する二体の巨体と手札のモンスターが混ざりあい、轟音と共に更なる巨大な影が現れる。試験会場のどこにいても目立つその巨体の後姿を見ながらも、私は相手に視線を飛ばす…さあ、これぐらいの対処はできるのだろう？そう問い掛けるように。

―

「……ちょっとそれは大人げないんじゃないですかー」
「いや、君ももう子供じゃないんだからそういうことは言わない」
思わず呟いた言葉に、試験官はごくまじめにそう答えた。
そんな軽い問答を挟みつつも、私は相手の場に現れた更なる巨人の姿に目を向ける。
うわぁー…大きいなー。
威圧感から目をそらすために、そんな気の抜けた感想を抱きながらも、
私は心の底からワクワクしている自分に気づく。
持てる力を出しあうのはやっぱり楽しい。見たことがない何かが其処にあると思うと自然に感情が高鳴る。

やっぱり私はデュエルが今でも好きだ。
ただ、そのワクワク感だけがデュエルの楽しさではない。
お互いの全力を出し合って決着をつけてこそだ。こんな浮ついた心でミスなんてしてしまったら、せっかくのデュエルが台無しになってしまう。
小さく息を吐き、瞳をつぶる。
高鳴る鼓動をそのままに、意識だけをデュエルに集中する。
浮かべる笑みはそのままに、瞳を開き、真剣に現状を判断する。
…あれだけのリスクを背負ってモンスターを出す以上、「こちら」と同じように相手にも何かがあるのだろう。
嫌だな…。いや、楽しいのだけど。
さあ、全力で殴り合おう！と思う私と、出来ればそれがわかるまでは攻撃してほしくはないと考える私がいる。
『で、どうするんだい？』
うまく整理できない揺らぐ心、あ、これ完全に浮ついたままだなーなんて思いつつも、パートナーの声に一瞬我に返る。今は判断しなければいけない。とりあえず更なるゆさぶりを…かな？
「えっと…では私は、特殊召喚にチェーンして永続トラップ発動！≪最終突撃命令≫」
発動したのは表側表示モンスターを強制的に攻撃表示に変更するカード。
私の不意打ちには最適なカードで、これと≪バトルマニア≫があれば、初見の相手なら沈めることができると踏んでいる。
これで何の準備もなく、相手がこのまま殴ってくれれば私の勝ち。
晴れて試験合格！やったね！で済むのだが…
だが、今の私は嫌な予感がして堪らない。あの盤面で使わなくてもいい≪パワー・ボンド≫を使用した相手に対して。
「また変わったカードを使う。それは本来こちら側が使うようなカードだろう？」

「正面から先生のカードを倒すために必要なんですよ。ほら、古代の機械（アンティーク・ギア）はダメージステップ終了時まで発動できないじゃないですか。」
「ブラフ…というわけではないか。本当にそのカードが私の究極巨人（アルティメットゴーレム）を超えれると？」
　超えられないけど、まあ迷ってください。できれば殴らないでそのままパワーボンドのダメージで私の勝ちに…そう思う私を尻目に試験官は、私の答えを待たずに言葉を続ける。
「…バトルだ！私は《古代の機械究極巨人（アンティーク・ギアアルティメットゴーレム）》で、そのセットモンスターを攻撃！トゥルー・アルティメット・パウンド！」
　ああ、殴ってきた⁉いや、頑張るんだ私。焦ってはいけない！相手に何もなければ私の勝ち！信じるんだ、私の新しいパートナーを…がんばれユベル！
『…期待には答えないとね』
　そう呟き、私のパートナーがフィールドにヴィジョンとして現れる。なんとも頼りになる背中だろう。後かわいい。そういってしまいたい気持ちを抑え、私はユベルの効果を説明する。
「セットモンスターは《ユベル》。《最終突撃命令》の効果！《ユベル》を攻撃表示に変更！そして《ユベル》の効果発動。…ユベルは相手から受けた痛みをそのまま返す。攻撃表示のこのカードが相手に攻撃されたとき、攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。終わりです！」
　当初の予定通り、相手のエースモンスターに《ユベル》を殴らせることはできた。これで何もなければ…
「ダメージ反射タイプのモンスターか。だが…」
　振り下ろされた巨人の渾身の右ストレートを、立ち上がったユベルが棘を召喚して受け止める。そして、直撃の轟音響き、砂煙まうその中から勢いよく棘が試験官の方に延び…
　勝ちたい。とは思う。でも、今は勝った！とはどうしても思えなかった。

試験官ＬＰ４０００→１２８００

『…なるほど。向こうの方が君と比べて一枚上手だね』

私にしか聞こえないユベルの声に、どうやら彼は何のカードか察したらしい。

倒したと思った相手のライフが回復していく。私もその回復した数値で何となくそのカードを察した。

「残念だったな。私は伏せていたトラップカード、≪レインボーライフ≫を発動した」

レインボーライフ。多分パワーボンドのリカバリー用カードだろう。もしくは、バーンデッキ対策か。試験官なんだから、ある程度あらゆる場面に対応できるカードは入ってるとは思っていた…が

「ごめんユベル。私のミスだ」

少なくとも、≪最終突撃命令≫を発動していなければ、ユベルの効果分のダメージを回復されることはなかった。結果論であっても、パワーボンドの段階でもう少し疑うべきだった。

『なら、諦めるかい？』

そんな私の言葉に、ユベルは冷たく返す。

まさか。ここで諦めたら私は何のために戻ってきたのか。というか、私のこと嫌いになるでしょ？なら、私はユベルに嫌われないためにも、失敗した分ぐらいは取り戻さないと。

その答えがわかっていたようにユベルは微笑む。ああ、やっぱりかわいい。初めて見た時から一目ぼれだったが、ずっと一緒にいてその気持ちはさらに高まってくる。

「≪ユベル≫は戦闘では破壊されず、戦闘タメージを受けない。ライフを回復されても、私の戦略はデッキ破壊もある。デッキが残ってる限り…まだ、私は負けてません」

「いい闘志だ。破壊できないなら追撃はできないな…だが、ライフは回復させてもらう。
《古代の機械魔神（アンティーク・ギアデビル）》で君の《ユベル》を攻撃」
先ほどと同じようにモンスターの攻撃に対しユベルは棘で返すが、その数値分ライフが回復する。
試験官　ＬＰ１２８００→１３８００
「私はカードを2枚伏せ、エンドフェイズだ。《パワー・ボンド》の効果でダメージを受けるが、《レインボー・ライフ》の効果で、その数値分ライフを回復する」
試験官　ＬＰ１３８００→１８２００
「なら、そのタイミングで私はトラップ発動。《バースト・リバース》。ライフを半分払い、私は墓地から裏側守備表示でモンスターをセット！」
藍沢陽彩　ＬＰ３０００→１５００
「ただでさえ少ないライフを削ってくるか」
「…次のターンで勝つぐらいの意気込みじゃないと、どちらにしろ負けちゃうでしょ？」
「ならば、次を楽しみにさせてもらおう。…間違っても《自爆スイッチ》なんて入れてないとは思うが。ターンエンドだ」

藍沢陽彩
ＬＰ１５００
手札３枚
《最終突撃命令》
セットカード1枚
《ユベル》　ＡＴＫ／０
セットモンスター1体

試験官
ＬＰ１８２００
手札１枚

《古代の機械要塞(アンティーク・ギアフォートレス)》
セットカード2枚
モンスター
《古代の機械魔神(アンティーク・ギアデビル)》　ＡＴＫ／１０００
《古代の機械究極巨人(アンティーク・ギアアルティメットゴーレム)》　ＡＴＫ／８８００

うん、強がってみたけど、かなり厳しいのは変わらない。…自爆スイッチなんて引いたら押してしまいそう。入ってないけど。
って、違うよ！そんなことしないよ？心を読んだのか、すごく憐みの目で私のことを見るのをやめてくださいユベルさん。
頭の中でそんな問答がありつつも、気を取り直して場の確認をする。
相手のデッキ枚数は残り１５枚…ん？４１枚デッキ？私の評判と言っていたし何かを足したのかもしれない。
私のデッキはサーチなどしていないし、４０枚デッキではないのでそれより多く１９枚。
うまく先ほどセットしなおしたカード、メタモルポッドさんを使えば、削りきれないということもないが…それも引き次第か。
「私のターン…ドロー！」
運命を託し、引いたカードを確認する。…思わず笑みがこぼれた。やっぱりデッキが答えてくれた時が一番うれしいものだ。
「どうやら、勝負を仕掛けられるカードを引いたようだな」
表情を見たのだろう、相手の言葉に視線を向ければ私はそっと今引いたカードをディスクにセットする。
「私はカードを一枚セット。…決まってくれればいいんですけど、それで大人しく負けてくれますか？」
「いや、試験官としてそれは御免被る。だが、何を仕掛けてくるかは楽しみにしているぞ」
「ではお言葉に甘えて…私はモンスターを反転召喚！もちろん《メタモルポッド》。効果を発動！それにチェーンして、手札よりもう一度《月の書》対象は…《ユベル》！」

「…メタモルポッドを使い回さない？」
「≪ユベル≫は裏側守備表示になり、その後お互い手札をすべて捨て５枚ドロー！」
　問題はここからだ。私のデッキ枚数は１８枚。そこから伏せたカードを使いこの現状を打破できるカードは数枚。分の悪い賭けだけど私はデッキを信じてカードを５枚ドローする。
　…カードを引いた瞬間閉じた瞳をゆっくりと開く、そして…
「…ありがとう」
　来てくれたカードに感謝の言葉を。
　ここまでデッキが答えてくれたのなら、私は全力で回しきるだけだ。
「まずは、その魔神さんにご退場願います！トラップ発動≪つり天井≫。フィールド上にモンスターが４体以上いるとき、表側表示のカードをすべて破壊する！これでその二体のモンスターを破壊する」
　発動と共に、上空より巨大なトゲ付き天井が落ちてくる。そのサイズたるや究極巨人をも巻き込むためかいつも以上に巨大なそれは、相手の要塞を守る二体のモンスターを粉砕する。
　自分のフィールドでもガチャンと陶器が割れる音が聞こえた気がしたが、きっと気のせい…ではなく、これも一種の私の愛である。ゴゴゴっと…壊れた巨人の中から現れる一回り小さい…といってもそれでも十分巨大なゴーレムに殴り倒されるかもしれないなら自分の手で…と。
「≪古代の機械究極巨人（アンティーク・ギアアルティメットゴーレム）≫が破壊されたとき、墓地から≪古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）≫を特殊召喚する。更に…」
「ん…更に？」
「≪古代の機械魔神（アンティーク・ギアデビル）≫は他のカードの効果を受けない」
「……へ？」
　思わず漏らしてしまった声、急いで視線をフィールドに戻すとそこには何事もなかったかのように要塞の上に立つ≪古代の機械魔神（アンティーク・ギアデビル）≫の姿が…。これは不味い。とても不味い…けど
「さあ、このターンで私を倒すか魔神を破壊しなければ、次の私のター

ンで君のライフはさらに減る。君の起死回生のカードは最初のターンから伏せていた≪つり天井≫ではないのだろう？」
試験官のそんな挑発するような声に、私は思わず笑みが漏れる。
ここで決めなきゃ負けるかもしれない…けど、それでも
ごめんユベル。私ワクワクが止まらない。
「それはお互い様です。そんなに見たいなら…受け取ってください。私は手札を2枚伏せ、さっき伏せたマジック発動！≪手札抹殺≫」
「ここでも徹底したデッキ破壊か。だが、私のデッキはそれでもまだ5枚…」
「もちろん残しません！さらにチェーンして、手札より≪連続魔法≫発動！手札をすべて捨て、効果を発動する。このカードは直前に使った≪手札抹殺≫と同じ効果になる！あなたの手札はメタモルポットの効果で5枚…二回手札交換をすればデッキ枚数は0。私は今度こそ勝たせてもらいます！」
答えてくれたカードを次いで発動する。不意打ちのように相手に強制手札交換を強いる私のデッキのエースカードともいえる≪手札抹殺≫と≪連続魔法≫。私は試験官を見て、そう勝利の宣言をする…が
「その発言はまだ早い。…私はセットしていたトラップ発動≪貪欲の瓶≫！墓地からカードを五枚選びデッキに戻し、1枚ドローする」
当然のようにそれに対応する試験官に私は思わず楽しそうな笑みを深める。悔しい…けど、楽しい。
「……削りきれない」
「手札が一枚増えるから、抹殺の効果で6枚交換を二回だな。これで私のデッキは2枚残る。≪古代の機械魔神（アンティーク・ギアデビル）≫の効果をあと2ターン使うことができる」
相変わらず場に残るこの場面では本当に悪魔にしか見えないモンスターを苦々しく見つめる。だけど…
「だが…君はあきらめないのだろう？」
「当然！私はさっき伏せた≪思い出のブランコ≫を発動！墓地に≪連続魔法≫のコストで墓地に捨てた≪魔族召喚師（デビルズ・サモナー）≫を特殊召喚。バト

ルフェイズ！バトル！≪古代の機械魔神（アンティーク・ギアデビル）≫を攻撃。悪魔には今度こそ退場願いします！」
その悪魔（デビル）以上に頼もしい私のデッキが味方にいるのだこんなところで止まるわけにはいかない。
試験官　ＬＰ１８２００→１６８００
「はは、流石だ。だが≪古代の機械魔神（アンティーク・ギアデビル）≫は戦闘で破壊されたときデッキから≪古代の機械（アンティーク・ギア）≫モンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する。私はデッキより……」
まだそんな効果あったんだ…なんてゲンナリしながらも、言葉の途中で止まる試験官を少し不思議そうに見つめる。あれ？何かあったんだろうか？そんな疑問に答えるように試験官はゆっくりと言葉を続ける。
「…対象モンスターがいないので不発だ。私のデッキ枚数は残り２枚。≪古代の採掘機（アンティーク・ギアドリル）≫と≪テラ・フォーミング≫」
強制効果ゆえの自身の残りカードを公開する。最近は特に義務はないのだけど、そこは試験官の律義さなのだろう。
だが、これでハッキリしたことがある。デッキに残ったカードではこの場をひっくり返すことができない。
「なら、私はこれでターンエンド。エンドフェイズ時、≪魔族召喚師（デビルズ・サモナー）≫は≪思い出のブランコ≫の効果で破壊される。これで≪古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）≫ではライフを削れませんよ？」
そう宣言し私はターンを終了する。少なくとも今の私に出来ることは全て出し切った。だから、きっと現状を打破できないと読んだ私の予想を上回ってくれるだろう相手に私は唯々楽しそうに笑顔を向ける。

藍沢陽彩
ＬＰ１５００
手札０枚
≪最終突撃命令≫
セットカード１枚

セットモンスター《ユベル》　ＤＥＦ／０

試験官
ＬＰ１６８００
手札６枚
《古代の機械要塞（アンティーク・ギアフォートレス）》
セットカード１枚
モンスター
《古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）》　ＡＴＫ／３０００

ターンが移り試験官がカードをドローする。そのとき不意に声が聞こえた。
「…君は今日のデュエルをどう思う？」
これも試験に影響するのかな？なんて少し考えてしまったけど、私は素直に答えることにした。
「楽しかった…かな？うん、楽しかったです」
答えを聞いて満足そうに、試験官はうなずく。やっぱりこの人いい人だ。そんな思いが私の中で確信に変わった。
「試験デュエルなのに、楽しむのか？」
「真剣なデュエルほど出せる力を出し切らないと。楽しくなければ出せないでしょう？…といっても、楽しいデュエルなんて久しぶりで。本当にありがとうございます」
続く言葉に思うままに答える。少なくともここまで全力を出せたのだ相手のおかげだった。
「感謝されるのは、デュエルが終わってからにしてほしいものだが。…私は手札より《古代の機械猟犬（アンティーク・ギアハウンドドッグ）》を召喚。効果を発動！猟犬は召喚に成功したとき相手に６００ポイントのダメージを与える」
藍沢陽彩ＬＰ１５００→９００
「《古代の機械要塞（アンティーク・ギアフォートレス）》の効果で、これに対して効果は発動できないんですよね？」
「よく覚えていた。…その通りだ。そして《古代の機械猟犬（アンティーク・ギアハウンドドッグ）》は融

合カードなしで融合召喚することができるが、私のデッキには≪古代の機械魔神(アンティーク・ギアデビル)≫は一枚だけだ。そもそも、試験デュエルに使うようなカードではない。」
「…思いっきり使ってるじゃないですか」
「いや、試験官としてただで負けるわけにはいかなかったからな」
苦笑いを浮かべる試験官に私も苦笑で返す。切羽詰まった状況なのに交わされるそんな他愛もない話。ああ…これはたぶん
「ただ、≪古代の機械魔神(アンティーク・ギアデビル)≫は1枚しかなくても≪古代の機械要塞(アンティーク・ギアフォートレス)≫は複数枚入っている。私はセットしていた≪古代の機械要塞(アンティーク・ギアフォートレス)≫を発動」
「同じカードを二枚?」
「私は墓地の≪古代の機械射出機(アンティーク・ギアカタパルト)≫を除外して、効果発動。自分フィールド上の表側表示カードを破壊する。私が破壊するのは≪古代の機械要塞(アンティーク・ギアフォートレス)≫。そして効果で≪古代の歯車トークン≫を特殊召喚。≪古代の機械射出機(アンティーク・ギアカタパルト)≫で破壊された≪古代の機械要塞(アンティーク・ギアフォートレス)≫の効果発動!墓地からアンティークギアモンスターを特殊召喚。再度現れよ!≪古代の機械魔神(アンティーク・ギアデビル)≫!」
隣に要塞がもう一つ現れたかと思うと、旧要塞は地下からの大爆発で粉砕。轟音とともに瓦礫の中から現れた見たくなかった顔に、どうすることもできない私は唯々眺めることしかできなかった。
「…だからもう一枚発動したんですね。私の伏せを警戒して」
「そういうことだ。あらゆることを想定して全力を尽くす。君が目指す場所はそういう場所だ…。それに私は君を信用している。きっとその伏せているカードは≪古代の機械要塞(アンティーク・ギアフォートレス)≫がなければ、私が負けていたのだろう?」
「あはは…ただのブラフだったんですけどね」
伏せていた≪魔宮の賄賂≫のを見ながらそうつぶやく。試験官の言葉はどこまでも優しいものだった。だからなのだろう、何となくではあるが気づいていた自身の敗北という事実を私は受け入れていた。
「私は≪古代の機械魔神(アンティーク・ギアデビル)≫の効果を発動!君に1000ポイントのダメージを与える」

宣言と共に要塞の上の≪古代の機械魔神(アンティーク・ギアデビル)≫から砲撃が放たれる。
私はただ茫然とその様子を見ながら…
「あ～あ…それでもやっぱり、勝ちたかったな」
そう小さくつぶやくのだった。
藍沢陽彩　ＬＰ９００→０

敗北、そして

砲撃の爆音が止み、閉じていた瞳をゆっくりと開く。
デュエルディスクから投影されていたソリッドヴィジョンは光の粒子になっていき、最後まで残ったユベルに、私は小さくだけどごめんと呟く。
次は負けないから。
そう心の中で言葉を続けて、消えていくユベルを最後まで見つめる。なんとなくヴィジョンのユベルも微笑んでくれた気がする。
悔しい…負けたこともそうだけど、ユベルをまだうまく使いこなせていないことが。自分の全力がまだこの程度なのが。
でも、この悔しさがあればまだ成長できる。成長すれば、いつかユベルを使いこなすことができるかもしれない。
そう思えば、少しだけ前にすすめる気がした。
私は今までと同じように止まっている訳にはいかない。ユベルの隣を歩くつもりなら。

「これで試験デュエルは終了だ。合否の発表は全てのデュエルが終了してからこの会場で行われる。負けたからと言って…」
「帰ったりはしませんよ！こんなに楽しそうなところ…じゃなかった。えっと、デュエルありがとうございました」
反射的に声を出してしまう。…多分これは久しぶりの楽しいデュエルのせいだ。敗北は辛いけど、それでも自分の全力で破れたのだ。全力を出すことができた事、それが嬉しくて、私はいつものように敗北したというのに笑顔を浮かべていた。

そんな私の笑顔に、どこか毒気が抜かれたのか、少しだけ困ったような表情の試験官が少し面白い。

「まあ何だ、君には少しすまないことをしたかもしれないが…」

「すまないも何も、負けたのは私の実力不足だし、試験だからといって、手を抜かれて勝っても嬉しくありません。…だから、さっきのはアレでいいんです。いや、負けるのは悔しいし、良くないけど。だからこそ…次はそう簡単に譲りませんよ？私はこう見えて、負けず嫌いですよ？」

そんな試験官が言い切るよりも前に、そのままありったけの悔しい嬉しい感情を言葉に乗せてぶつける。仕方がない、こんなに感情的になるのなんて久しぶりだから。それに試験官さんなら受け止めてくれそうな気がしたから。

「…君には必要ない言葉かも知れないが、負けは勝利するよりも学ぶことが多い。負けはいつか君の財産になる。君が私を倒せるまでに成長するのを楽しみにしているよ。…では、次のデュエルがあるので１１９２番藍沢、終了まで会場の中で待機していてくれ」

待機という言葉に、私は名残惜しそうにデュエルフィールドを見つめる。『もっとデュエルをしたい』もちろんそんな我儘は許されないがそれでもこれぐらいは言ってもいいだろう。

「わかりました。…私必ず再戦します。だから、再戦の約束をしてくれませんか？」

「…それは、来年もまた受けるという意味でとってもいいのかな？」

あ、これは意地悪な笑みだ。わかってやっているのはわかるけど、一応は止めておこう。

それはそれは困ったような顔を私はわざと浮かべながらも言葉を

返す。

「ああ、それは困ります！えっと、できれば、入学してから再戦したいかなー…なんて」

「それは君次第だ。君が合格していればその機会は必ずある。しかし…こんなことをこの場で言うのもあれなのだが、一応今も試験中だからな？」

やはり喋りすぎてしまったようで釘を差された。それでも約束とも取れるその言葉に私は満足したように頭を下げる。

「あ、はい、すみません黙ります！…試験官も、残りのデュエル負けないでくださいね」

私が勝てなかったのだ、そんなこの人に勝つ人がいたら、ちょっとだけ悔しい。

「…まあ、努力させてもらうさ。では、次のデュエリストの呼び出しを行う。次は…」

そんな私の考えを読み取ったのだろうか、少し考え苦笑しながら返してくれた試験官に私はもう一度小さく礼をして、その場を離れるように歩き出した。

それにしても…

「お、アイツがデッキ破壊使ったやつか？」

「お前声かけてこいよ?」
「すごい根性してるよな…」

少しだけ目立ちすぎてしまったかな?
…なんとも野次馬根性あふれる会話だろうか。なお、その当事者な自分には辛いものである。
聞こえる声、視線に苦笑いを浮かべながら私は会場の中を見回す。
先程の対戦相手である試験官さんは相手がまだ到着していないので、他のフィールドを見ようと立ち止まれば、それと同時に野次馬数人の足が止まる。少ししてその中のひとりが何かを言いたそうに私に歩み寄ってきた。
その気配に野次馬さんにしては根性あるな〜なんて思いつつ、そっとそちらに視線を向ければ近寄ってくる影は小柄で、多分女の子だろう。
このまま声をかけられると少しだけ荒ぶった感情では何を口走るかわからない…こういう時は

「あの、試験でのあのデッキ…」
「私、日本語分からないノーネ」

なんて、昔何故かデュエルアカデミアで流行っていた、とある教諭の口調らしい?言葉で聞かなかったことにする。
今日始めて会っただけのただのギャラリーならだいたいこれで煙に巻ける。
…そう思ってたのだが。
「え?あ、あの!…あ、ちょっと、待ってください!」
「待たないのでアール」

どうやら駄目だったらしい。呆気にとられつつも果敢に声をかけてくる彼女を無視して私は歩き出す。
それにしてもしつこいな…楽しいデュエルの後だから、私全然落ち

着いていないのに。
今、仮にデッキ破壊を、メタモルを、私の戦略を否定される言葉を聞いたら、きっと溢れる思いが悪い意味で止まらない気だろう。
端的にいうと、相手が男性なら感情のままに無言で腹パンを繰り出す可能性もある。
いや、余程のことを言われなければそんなことはしないけど。そもそもそんなことすれば多分受験で落ちてしまうけど。
それぐらい今の私は抑えが効かないのだ。…早くこの場を離れなければ。
ああ、建物のスミスが恋しい…あそこなら人の目なんて気にならないのに。
そもそも、なんでデッキ破壊ぐらいで私は目立たなければいけないのだ！
デッキ破壊の一般浸透を私はプロになったら訴えてみよう。
そう心に誓いつつ、彼女を無視して歩く…だが、やっぱりそれを止めるように立ち塞がる彼女。

「…待たなくてもいいので、これだけは言わせてください」

言いたいこと？…そんなに私のデッキが気に入らないのかな？そう思い、真っ直ぐに彼女の顔を少し睨みつける。
男性の体にしては小柄な自分よりもさらに小柄な、きっと男子的に見れば可憐で華奢などという言葉が似合うのだろう眼鏡の彼女を。というよりも、どう考えても相手の印象は見た限り内気な感じがするのだけど。普通ここまでされれば何も言わずに立ち去ると思ったのに。
こういうのはアカデミアを辞める前に何度もあったから私は慣れっこです。いや慣れすぎて、それで荒んでアカデミア辞めたのだけどね！
そんな私の心を読んだわけではないだろうけど…それでも、そんな私を止めるように、彼女は私に諦めず予想外の言葉をかけてきた。

「…すごかったです！あんな風にメタモルポッドでデッキを回し切るの」

そう喋る彼女の目には、その言葉には悪意など無くて、純粋に尊敬の念さえ感じた。

だから私は、その言葉を理解するのに少しだけ時間がかかってしまって、そんな少しの空白の間、辺りからは険悪な雰囲気に様子を見ていた周りのギャラリーの「え？」なんて声が聞こえた気がする。

少しだけ気持ちを落ち着かせるための深呼吸。

うん、落ち着かない。深呼吸すれば大丈夫って言ったの誰だ！

ああもう、そんなこと言っちゃいけないのに。今私全然落ち着いてないのに…。

でも、仕方ないよね？これは向こうから話しかけてきたことだし。

…つまり、私と話がしたいということだよね？きっと私が今から何か口走っても受け止める覚悟があるということで、ファイナルアンサー？うん、答えは聞かないけど。

押し黙る私に、どうやら何か不味い事を言ってしまったと勘違いしたのか、少し慌てだす彼女に私は…

「わかる？これも愛のなせる技だよ！」

ギュッと躊躇すること無く彼女の手を握り、先程とは違ってとても楽しげに、実際嬉しくて仕方がない私は満面の笑みを浮かべながら彼女に言葉を続ける。

彼女の言ったそれは、今の私にある意味一番言ってはいけない言葉。そして、これが長い付き合いになるその子との忘れられない最初の接触になる。

『さて、一番の難題は色んな意味で終わっちゃったけど、後は気を楽にして色んな人のデュエルを見に行こうか。…それにしても、ここだとユベルも元気そうだね』

声をかけてきた女の子にありったけのデッキ自慢とデュエル論を語りきって、すっきり顔で落ち着いた私は、その女性（名前は聞き忘れたが今度会えたら聞いておこう）と別れブラブラと試験会場を歩き回っていた。

先程の彼女との問答の様子が程よい人払いになったようで、遠目に私を見てくる目はあっても直接話しかけてくる人はいない。というよりも、なんだか聞こえてくる声に「メタモルポッドフェチの変態」って聞こえたのはきっと気のせいだと思いたい。

そんな声を無視して私は心の中でユベルに語りかける。理由は単純に周りの目があるからだ。

…人の目が気になるなら普段から心の中で会話すればいいのだが、これはこれで結構集中力と精神力を使うもので、普段は普通に声に出して話しているのだけど。

『…デュエルエナジーが溢れてるからね』

そんな私のデュエルと激論の後で減っている精神力と集中力を使った言葉の返答はそっけないものだった。そっけないくせに声からは元気が有り余ってる感じがする。端的にいうと覇気がある。

ねえねえ、元気そうなユベルさん、そろそろ私は聞いてもいいと思うのだ。

『出会ってから思ってたんだけど、そのデュエルエナジーって結局何？』
『口で説明するのは難しいね。僕みたいなカードの存在が存在するのに必要なエネルギーだと思ってくれれば』

うん、意味がわからない。カードの存在が存在するためってところが特に。
これはきっと私の理解力が低いからではないと思う。
そう思いながら、私は目についたデュエルフィールドのデュエルに何気なく視線を向ける。
うーん…おお！レッドアイズだ！アレでデッキを作るなんてお金持ってる人もいるんだなーなんて思っていると、続く試験官側の無慈悲なバスター・ブレイダーを見て私はそっと目をそらした。
受験生、強く生きるんだよ。まあ、私も負けたのだから何も言えないが…。

『…ユベルが存在するのに必要ってことは、逆に言えばエナジーがあれば他のカードも？』
『その意思があればね。…そもそもどの様なカードにも、モンスターカードであれば少なからず意思がある』

無茶苦茶なことを言っている気がするが、ユベルの言葉に私は少しだけ納得する。
もしそうなら、私の手札に彼が来てくれるのも理解できたから。

『なら、メタモルポットさんにも？』
『…むしろ、意思がないと思ってるのかい？』

ユベルがジト目で逆に問いかけてくる。あ、その視線とてもいいです。
何となくドキッとする自分にそっち方向の何かがあるのかもしれ

ない。
…ダメダメ！おかしな事を考えてはいけない。最近気づいたのだけど私の考えてること、断片的ではあるがユベルにも知られている気がする。
私は誤魔化すように、そっとその視線から目をそらし。
「…全然。いつもありがとうございますメタモルさん」
デッキからカードを一枚取り出す。適当に選んだカードだけど多分来てくれると思ったメタモルポットさんに小さく声をかける。
『何を動揺してるかわからないけど、声が漏れているよ陽彩。…まあ、喋る喋らないはそのカードの精霊の力次第だね。君のメタモルなら喋れても可笑しくはないけど』
『動揺なんてしてないよ！…でも、それは聞きたいような聞きたくないような』
さっき硫酸に落とした上で吊り天井で叩き壊した後ですし。あ、もちろん愛のムチです。
でも、愛着か…私はまず間違いなくこの子に愛着を持っている。それがこの子に力を与えたのなら嬉しいのだけど。そういえば、似たような話を何処かで聞いたことがある。あれは…
「…なんだか付喪神みたいだね」
『付喪神？』
思考ではなく、声に出た言葉にユベルが今度は逆に聞き返してくる。
『長い年月使ったものに、霊や神様が宿ること…だったかな？私流石にそこまでは詳しく知らないけど、昔何処かで聞いたことがある』

『その認識はあながち間違いじゃないね。思い入れ、デュエリストの思いが強ければ強いほどカードに込められるデュエルエナジーも増えるし』
『じゃあ…ユベルも昔は誰かに使われていたのかな？』

それは何となく今まで聞けなかった言葉。ただ、帰ってきた言葉はどこまでも悲しげで

『残念だけど、僕はその記憶を無くしている』
『…そうだったね。なんかごめん』

淡々と語られるそんな心の声を聞いて、私はただ謝ることしかできなかった。
記憶が無いという状況は私にはわからない。生まれたときの記憶が無いのか、それとも断片的に抜けているのかそれすらまだ私はユベルから聞き出すことが出来ずにいた。
ただ、これだけは想像できる。それは恐怖しかないのだろうということ。
私には苦い経験も、後悔もいっぱいある。それらの積み重ねで今の私がある。
その今の自分を構成する記憶と経験が一部でも欠けているのなら、そして、それが理解してしまったのなら、そう考えるだけで私はきっと私でいられなくなる自信がある。
それから私達は何となくお互いに声をかけづらくなって、周りで行われている試験デュエルの様子を只々眺めていた。

それから数刻、最後の試合終了の合図が聞こえる。残っていたデュエリストの興味がその一点に集る中、私はデュエルフィールドの周り人混みの中からではなく、自分たちが最初にいた、人気の少ない会場の隅、壁沿いに設置された長椅子に座りながらモニター越しにその様子を眺めていた。

「…さっきのデュエルで一応は全部終了かな。うーん、やっぱりデュエルはいいね～。観戦してるだけでもワクワクする。えっと、ユベルは…どう思った？」

なんとなくずっと話しかけられずにいたユベルに、私はちょうどいいきっかけとだと思い、そう話を振ってみた。これで、只々無言で流されたらさすがの私も凹んでしまうが…

『…流石にそれなりのデュエリストは揃っていただけはあるね』

ぎこちなくではあるが言葉を返してくれるユベルに安心しつつ苦笑を漏らす。どうやらお互い話しかけるタイミングを図っていたらしい。

「それにしても、やっぱり面白いデュエルがいっぱいだった。…これじゃあ、デュエルに負けた私は入学は難しいかな…」

『君はデュエルの内容に夢中で勝敗は気にしてなかったみたいだけど…僕が見ていた限り、試験官に勝った受験者一人もいないみたいだけどね』

「え？何それ試験官怖い」

正直それが本当なら、試験官達は化物か。いや…でも、伝説のデュエリストクラスの実力者が先生ならそれが普通なのかも…なんて考えていた私にユベルが補足するように言葉を続けた。

『普通に考えれば、ある程度受験者のデッキ戦術を会場側が把握していて、それぞれにあった対戦相手にぶつけられたんじゃないかな？』
「…確かに、相性悪いと思う試合も多かったし、あ、それで私のことを知っている素振りだったのか。デッキ枚数も変だったし、各試験デュエル前にデッキを組み替えてましたね…試験官さん。だから本来試験で使うようなカードじゃないと。…まあ、私は楽しかったからいいんだけど」

ただ、仮にそうだとすればそこには必ず意図があるはず。
…受験者を全員可能なら負かしておく必要があったということか。
理由はいくつかあるだろうけど、あくまで渡しができるのは想像だけ…

「仮に勝った人がいたら、入学は確定で奨学金が出る！とかかな？まあ先生を超えてたら、確かに授業料払って学校に入る意味もそんなにないもんね。デュエルアカデミアを卒業した段階でプロ入りしている人も多いし。……私、入れるかなー」

少なくとも全員が負けたのなら、後はデュエルの内容が審査対象になるはずだ。
そう考えると、少し不味いかもしれない。…だって
『陽彩の戦略ははっきり言って外道だからね。心証悪いんじゃないかなー』

ユベルが私の考えていたことをズバリそのまま口にする。
いけない、その言葉は私に効く。

「ああ…、身も蓋もないこと言わないで。地味に一番気にしてるのに」
『でも、変える気はないんだよね？』

ユベルは表情を変えることなく、いや、少しだけ楽しそうにそう囁いた。
そんな表情でズバズバと言ってくれるユベルさんは本当に天使だと思います。
ただその言葉に、私は数秒考える素振りを見せ
「私思ったんだ、嫌われたのはさ、きっと私の実力不足だって」
『…今誤魔化したね』
ああ、やっぱりそのジト目がいいです。っと悟られてはいけない。
緩む顔を引き締めて私はユベルを見て言葉を続ける。
「だから、私はもっと強くなって自由自在にデッキを回せるようになる。信頼してるよ?ユベル」
『信頼するのはいいけど、使いこなせるかどうかは君の努力次第だよ?』
「はい、肝に銘じておきます」
『…緩んだ顔で言われてもねぇ』
「あ!?やっぱり緩んでた?」
『冗談だったんだけど。…っと、陽彩、誰か来たみたいだよ?』
ユベルの言葉に慌てて辺りを伺う。この状況を見られていれば完全にただの独り言を言っている不審者だ。更にフードもかぶっているので怪しさに拍車が掛かっている。
「あ、やっぱりいた!藍沢さんですよね?」
ただ、そんな怪しい私に声をかける相手の顔を見て、どこか安心して少しだけ顔が緩む。
流石に友達をすごい勢いで無くし、黒歴史にして思い出を心の奥に

封印した私でも、さっきまで話していた相手の顔までは忘れない。

「えっと…わざわざどうしたのかな?」

「もうすぐ、合格者の発表なのですよ。それで、あの…なんだか人混みを避けてるみたいで気づいていないかもしれないって…」

そっけなく返す私に、彼女は先程の最初のやり取りを思い出したのだろう、途端に表情が曇る。ああごめん!あのときは落ち着いてなかったから。私は急いでフォローするように自分の中で柔らかい方だと思う笑みを浮かべる。

「…うん、ごめん。それと、ありがとう」

私の声を聞き、曇っていた表情がとたんに晴れる。なんていうか、コロコロ表情が変わる子だなーなんて呑気に思っていると。

『デュエル中の君も人のこと言えないレベルで、コロコロ変わっているけどね』

なんて言葉が聞こえる。うう、やっぱり心を読まれてる。

ただ、彼女の言葉はそれで終わりではなかった。

「それで、よろしければ一緒に見に行きませんか?私、ここに一人で来たんで、なんとなく心細くて…」

多分、こっちが本題なのかな?意を決したよう問いかける彼女の言葉に

「あ~…私は別にかまわないけど…。ただ…」

「ただ?」

少しだけ言葉を濁して答える。その言葉で察したのか

『…僕も別にかまわないよ』

ユベルがそう答えたのなら、私は安心だ。どこか不安げな彼女に、最初の悪い印象をここで払拭しようと、もう少しだけ努力して優しく微笑みかける。

「ごめん。言い方が悪かった。私からもお願い。…実は私も知り合いがいなくてさ。こうやって一人寂しく建物のスミスで結果を待ってたんだ。」

「…建物のスミスですか？」

「そ、建物のスミス。私にみたいなはみ出し者はこういう所がお似合いなのさ！じゃなかった、単純に落ち着くんだよ」

「…なんとなくわかります。私も時々一人になりたい時がありますし」

うーん、実は私の場合二人で話したい時なんだけどなんて、口が裂けても言えない。

「そんな感じ。それとさっきはごめんね。…私って、デュエルが大好きだったから。こう、デュエルが終わった後は、感情が高ぶったままで、何ていうかふわふわしてるからさ。何か話しかけられると感情的になっちゃうんだ。だから、あの時話しかけられないようにあんな態度取っちゃっただけだから」

「え？あ…いえ、気にしてません。その後の感情的なお話も大変興味深いものばかりでしたし。特に、友達を作ろうと思って作った握手デッキの話とか」

「アレは…うん、すっごく楽しいデッキなんだよ。相手のえ!?とした顔なんて特に。っと、その話をすると長くなるからさ、とりあえず先に結果発表見に行こう？」

危ない危ない…、彼女がとても楽しそうに笑うものだから、私もまた語りだしそうになったじゃないか。そんな私に淡く笑みを浮かべながら彼女はキャリングケースから、入学試験概要が書かれた資料を取り出す。

「えっとですね、合格者はメインデュエルスペースで試験官が名前を読み上げて発表するらしいです。…一応はいない人の為に会場設置ディスプレイでも合格者の番号はわかるらしいのですが、入学に際しての注意事項などもあるみたいです」

『緋彩、デュエルで頭いっぱいで、そういうこと忘れてたわけじゃないよね？』

番号が発表されるならモニターでも良いか。…なんて思ってた私の思考を読んでいたユベルに釘を差される。誤魔化すように私は急ぎ歩き出し始め早口で

「なら、善は急げ！できるだけ前に行って、合格したデェリストの顔覚えておかなきゃ」

そう言って彼女に手を差し出す。

「そうですね、もしかしたら同級生になるかもしれませんし」

そう言って、私の手を取ろうとする彼女に…

「私が落ちていた場合、辻デュエルで鬱憤を晴らすためだよ」

「…え？」

「ああ、ごめん！冗談だから、そんな地味に距離を取らないで！…でも、確実に強い人だから機会があれば戦いたいかなって」

少しだけ巫山戯てみたのだけど、思った以上に普通に返されてし

まって戸惑う私を見てユベルが笑っている。仕方ないじゃないか！
最近ずっと一人だったから。
でも、そんな彼女はそんな私を笑うでもなく
「…本当に、デュエルがお好きなのですね」
ただ、真っ直ぐそう問いかけてくる。いや、問い掛けというよりも確信を持って。
そう問われて私は考える。今まで出すことのできなかった答えを。好きだったデュエル、友達を奪ったデュエル…それでも、それを含めても私は
「うん。間違いなく大好きだよ」
すんなりと出すことができた嘘偽りのない言葉。いざ言ってみるとやっぱりそうなんだなと実感する。
私からデュエルは外せない。楽しい思い出はデュエルとともにあって、悲しい思い出も、友達もデュエルで無くした。良いことも悪いことも含めて、きっと私の全てが詰まっているのだろう。
だからだろうか、なんとなく私にもわかった。
「そういう君だってそうだよね？じゃなかったら私にあんなこと言わないもん」
「…はい。私も大好きです」
そう言って笑う彼女につられて私も微笑んだ。なんとなく出せなかった答えを引き出してくれた彼女に心のなかで感謝しながら私達二人は自然に手をつなぎ歩き出した。

合格発表、それから

人混みをかき分け、二人はなんとか目標であるデュエルスペースに到着する。

一応建前上男性な私は、できるだけ前に行こうと彼女の壁になりつつ、グイグイ人混みの中を更に突き抜けていく。

……うん、こういうのは慣れないな～。なんて、心の中で愚痴りながらも、できるだけ前でと言ったのは私なわけで、ならこれぐらいは頑張らなければいけない。

なんとか発表前に到着できたのか、辺りはまだそれぞれ一緒に来たのだろう友人達と話す声で溢れかえっていた。

「どうやら、まだ始まってはいないみたいですね」

「…いや、ちょうどいいタイミングだったっぽい。ほら、あそこ」

私の後ろから前に出た彼女が言った言葉に、私はそっと指をさす。

デュエルスペースの中央では一人の試験官が書類を片手にマイクのテストをしている。

聞こえてくるよくある、マイクテスト…チェック、ワン、ツーという声に、少しずつではあるが、それに気づいたのだろう、自然と周りの声も小さくなっていった。

周りの喋り声が止まったのを見計らって、試験官が声を上げる。

「では、これより合格者を発表する！」

その言葉に静まった会場がまたざわめき出す…

周りを見れば、それぞれ表情は多種多様だ。

どこか諦めているもの、自分は合格していると信じて疑わないもの自信に溢れたもの。だが大多数を占めるのは不安だ。私はなんとなく隣の彼女をそっと見る。

「ん？…大丈夫です。私、これでも少しだけ自信がありますから。それに藍沢さんも大丈夫ですよ。あれだけ楽しそうなデュエルができてたんですから」

私の視線に気づき、困ったように首を傾げながらもそう言う彼女は、それでもやっぱりどこか不安なのだろう。口調とは裏腹に、きゅっと握り込んだ手に力が入っている。かと言う私だって不安だ。私は自分自身にそこまでの自信はない。たしかに人とは違うことをしている自覚はあるが、それは自信にはつながらない。

…だけど、私のパートナーは違うようだ。

『心配しなくても、君はここで落ちるような人間ではないよ。なにせ僕のパートナーだからね』

そう、心の中に声が聞こえる。

たったそれだけで自然と自信が湧いてくるのだから不思議だ。

私はその言葉にニッコリと微笑む。

「…そうだね、大丈夫」

「はい！」

嬉しそうに私に言葉を返す隣の彼女に、心の中小さくごめんねと呟く。

なんとなく罪悪感。それは彼女には言えないけど。

どうやら発表は番号順らしく、ナンバーが低い順に合格者が発表されていく。

私の番号は１１９２番。いい国と、とても覚えやすい。

徐々に読み上げられる数字が自分の番号に近づいていく。

それにしても、こういう読み上げって心臓に悪いと思う。

１１９１番の人が合格だと、１１９まで一緒だから変に緊張してしまう。自分よりも後の数値を呼ばれたらその段階で落ちていること

になるし…
って試験官さんが１１９まで読み上げた!?
「受験番号１１９１番…」
「って、一つ前！」

ああ、心臓に悪い。
思わず上げた声に周りの視線が集まる。
あ、すみませんと頭を下げた瞬間

「…受験番号１１９２番、藍沢陽彩（あいざわひいろ）」
『普通に読み上げられてるね、おめでとう』
「あ、はい」

頭を下げている途中に聞こえた自分の番号になんとも居たたまれない気持ちになる。
うん、確かに嬉しいよ。なんかタイミングを逃してしまったよね。
ゆっくりと視線を上げ隣を見れば、自分の番号で気づかなかったが彼女も合格しているようで、嬉しそうに少し燥いでいるその姿を見ているとなんだろう、こっちまで微笑ましい気分になる。

「えっと、合格おめでとう」
「藍沢さんも、おめでとうございます」

気がつけばお互いにお互いの合格を祝いあっていた。ただ、あまり騒ぎ過ぎるとまた周りの目が痛いので、抑え気味に抑え気味に。
そう思いつつも自然と頬が緩むのだから仕方がない。
アカデミアを辞めてから特に目標もなく生きてきた私が、誰かのためにと思い立って初めて立てた目標を達成したのだから。

『僕のためにご苦労様。まあ、大変なのはこれからだけどね』

『そうだね。でも、その『これから』があるって良いことだと思うんだ』

少なくとも、ユベルと出会う前は、アカデミアを一度辞めた後は、私は何もない毎日を只々過ごしていた気がする。だから、今目の前にあるとある目標がどんなに難しいものでも、進むべき道、目指すべきものが続くというのはやっぱり嬉しいものだから。

「受験番号２５２５、酒井利須（さかいりす）。…合格者は以上だ。番号名前を呼ばれたものは、隣のデュエルフィールドに集まってくれ。それ以外のものは解散。機会とやる気があれば来年の君たちの受験に期待する」

そうこう二人で話している間に、最後の合格者が発表されたらしい。受験番号２５２５…あれ？確かＤＡＵＳ発表の試験受験者は２５００人だったはずだけど…特別枠かな？

まあ、私が考えても仕方がないし、合格者ならいずれ話す機会もあるだろう…今はそれより移動しなければ。

号令とともに、発表現場に集まっていた人々は、それぞれ別々の場所に向かって歩きだし始める。

意気揚々と隣のデュエルフィールドに移動するもの、そして暗い表情で荷物をまとめ会場出口に向かうもの。…耳をすませば嗚咽も聞こえてくる。

当然ではあるが、試験である以上少なくないデュエリストが合格すること無く、この場を去っていく。

「…わかってたけど、全員は合格できないよね。きっと面白いデュエルした子もいたんだろうなー。その人の分も私頑張らないと。…ふ…はは、そんなこと、私が言う言葉じゃないか」

言葉にして、そしてその言葉が逃げた自分が言ってはいけない事に気づいて、なんとなくまた罪悪感に苛まれる。

どの顔下げて戻ってきたんだろうね、私は。

「どうしたのですか？藍沢さん」
「あ～…。少し昔のこと思い出しただけ。気にしないで。それよりもさ、行こう行こう。移動しながら、面白そうな人の顔覚えるぞー」
「覚えておいて、それで、挑むんですね」
「…当然。あ、レッドアイズ使ってた人も残ってる！」
「藍沢さん。あそこにいる人も、なかなか面白いデュエル展開をしていましたよ？」
「ほんと？よーし、顔覚えたぞ」

楽しげに笑みを作りながら、楽しそうに会話をしながらも、私は急ぎ足でその場を移動した。
なんとなく、落ちた人の表情、声をこれ以上聞いていたくなかったから。

移動した私達を待っていたのは、ごく当たり前な入学資料の配布と、ＤＡＵＳについての再度説明だった。
口頭説明の為に試験官がデュエルディスクに一枚のモンスターカードをセットする。
それに反応しデュエルフィールドには大きな島の地図が表示される。
さすがＤＡＵＳというべきか、これ用にそういったカードを作ったんだなと理解し、現れたヴィジョンに視線を向ける。
ソリッドヴィジョンを使った説明はとてもわかり易く、むしろ無駄に凝っているのか、モンスターカードとして効果を発動すると、自身

をリリースして、次の説明用モンスターをデッキからでデュエルディスクがサーチして特殊召喚するという無駄っぷりで、思わず笑ってしまった。

『ねぇ、ユベル。あれも一応モンスターカードだし、カードの意思が…』

『いや、…流石にないんじゃないかな』

そんな他愛のない脳内会話をしながら、説明されたことを頭の中でまとめる。

ＤＡＵＳはデュエルアカデミアと同じで全寮制、完全に孤立した島の中で卒業まで過ごすことになる。

今回の受験合格者は受験者２５００人中の３００人。それぞれ、上位からオベリスクブルーに１５名、ラーイエロー５０名、オシリスレッド２３０名、特別クラス５名に分けられる。

クラス分けについては、島への移動中に船内で行われる交流デュエル大会の結果を参考にしてクラス分けが行われるらしい。

ただ、これらの構成はあくまで入学初期の所属であり、学内の功績成績によってクラスは変動する。

最初はオシリスレッドの人数がかなり偏ってると思ったが、あくまでも階級が上がる前提の構成なのだろう。生徒のやる気を上げるためには仕方ないのかもしれない。

私がいた頃のオシリスレッドは、底から這い上がってブルーになったものは大成するなんてジンクスがあったし。

それにしても、デュエルアカデミアと違って、女子はオベリスクブルー固定というのもないみたいだ。

周りを見ても女性デュエリストが何人か見える。もちろん隣の彼女も含めて、１５人以上は確実にいることになる。

あとは、デュエル学部から他の学部への編入も可能で、逆もまた然りらしい。

それにしても、やっぱりＤＡＵＳも島にあるんだ。島全体が施設と

してのＤＡＵＳ…
つまりＤＡＵＳ島だね！
きっと、島を開拓しているアイドルデュエリストがいるに違いない、なんて頭のなかで勝手な想像をしていると。
「みなさーん、注目!!注目ですよ～！」
中央で号令を上げていた先程の試験官ではなく、多分職員さんだろう女性が説明を受け終わった合格者たちにマイクで声をかける。
多分なのは、なんというかその女性の服装が職員というよりも研究者のような白衣を着ていて、特徴的な黒縁の度の強い瓶底眼鏡をしていたこと。
これはもしかしたら、ほんとうに研究職の人で、今日はたまたま駆り出されただけ出る程度説明できるのだが。
ただ、私が彼女を見て最初に思ったことは
『「…小学生？」』
彼女を見て思わず口に出た私の言葉とユベルの言葉がハモった。
その女性はどう見ても小学生にしか見えない幼い外見をしていたからだ。狙ったかのような黒髪の少し長めのおかっぱ頭に、サイズが中々無かったのだろう少し大きめでブカブカな白衣が余計に幼さを際立たせている。
「…可愛い方ですね」
「あー…うん、見た目通りなら」
「見た目通りなら…ですか？」
私の呟きに、隣の彼女が不思議そうに呟く。
でもわかる、わかるぞ。私にはわかる。あの幼そうな表情で浮かべる笑みは作り笑いだ。言うなれば、こうすれば可愛いんだぞ！ていう

のをわかった上でやっている確信犯か。ただ、どことなく無邪気さが足りない。…ん？というよりも、何か怒ってるのを隠そうとしているのが正解かもしれない。

私がそんなふうに思いながら、その小学生、もとい職員さんの言葉の続きを待つ。

「合格者は一週間後身の回りの準備をし、港に現地集合となりま～す。そこからＤＡＵＳ所有の船で島に向かいます。詳細については手続書類の中に別紙資料、私が夜なべして作ったのが入っていますので、それぞれ確認してくださいね！見てくれないと私怒りますよ！荷物が多い場合は、予め資料に書かれた業者に連絡を入れておいてください。後、これは入学事項、ＤＡＵＳの説明とは関係ないのですが…私の事小学生とか言ったやつ、今この場の音声残ってるから入学してから覚えとけよ！」

明らかに可愛らしい声から一転、凄まじいドスの効いた声色で最後の言葉を言い終われば、ニコリと笑みを浮かべ直し、可愛らしく一礼してその女性は去っていく。心なしかその去り際、人垣が彼女を恐れて割れた気がしたが、多分気のせいじゃないだろう。

「ゴホン…ええ、説明は以上で終了だ。入学金の振込先、奨学金についても資料が入っているので確認をするように。と言っても、ここにいるのは子供ではないから、そのあたりは大丈夫だろう。以上で、話は終わりだ。解散！」

記憶に残る最後の一幕から一転、周りに残っていた合格者たちもそ

れぞれ、思い思いに抑えていた合格の喜びを噛み締めていた。私たちはというと…

「…それじゃあ、これからは同級生ってことかな？私の名前は…まあ、知っているだろうけど藍沢。藍沢陽彩。君は？」

そういえば自己紹介をしていなかったことを思い出し、私は今まで一緒にいた女性に向き直る。

正直、もっと早くに自己紹介をしても良かったかもしれないけど、どちらかが落ちていた場合、なんと話しかけていいのかわからなくなる。…これは私が人付き合いが苦手とかじゃないから！受験ああるだから。

そんな私の言葉に、彼女は少し、いやかなり深刻に考えるような素振りを見せた後、ゆっくりと口を開いた。

「えっと…私は御園司（みそのつかさ）と申します。…少しでも記憶に残ってくれたら」

…うん、なんだろう。

さっきまでの普通に受験やデュエルの話をしていたときと違って、なんだかとっても雰囲気が重い。何か、聞いてはいけないことでも聞いてしまったかな？私は名前を聞いただけなのだけど

「あはは、なんだかすごい自己紹介だね。うん、でも私は忘れないよ」

今は深く踏み込んではいけない気がしたので、私は軽く流し笑顔で言葉を続けた。

少なくとも、こんな自己紹介をした時点で私は相手のことを忘れるようなことはないだろう。

その言葉に安心したのかは分からないが、表情が少しだけ明るくなった相手が眼鏡越しにじっとこちらの瞳を覗き込んでくる。

「それで…一つ気になったことがあるのですが、よろしいでしょうか？」
「ん？何かな～？今の私は御園さんの質問なら、なんでも答えちゃうぞ！」

相変わらず、見つめられたままでは少し照れるな…なんて思いながらも、まっすぐに彼女の方に私も視線を合わせる。
でも改めて聞くということは、何か彼女にとってどうしても気になることなのだろう。でも

「…藍沢さんって、男の人ですよね？」

これは不意打ちだった。え？私どこからどう見ても今の姿は男の人でしょ？そういうふうに変わったし、自分でもバッチリだと判断している。…なんでユベルこっち見て笑ってるの!?

「そ、そんなの当たり前じゃないかーやだなー」
「でも、口調は完全に女性みたいで…」

うん、バッチリ疑われています。本当にありがとうございました。
追求するような相手の視線は変わらず私を見つめている。

「僕が女性のワケナイジャナイカー」

そんな目に私は耐えられなくなって、無理に一人称を変えてみるも、あまりにもテンパってしまい、呟く言葉は少しだけ片言になる。
そんな私を見かねてか

『動揺しすぎだ。少し無理があるよ。だからアレほど口調も直さなきゃと』

『でも、こういう男子は地味に人気があるんだ！…漫画の世界ではだけど』
『…それって全然駄目じゃないかな？』

呆れるユベルの声が頭に響く。そんな空白の間に彼女もどうして良いのかわからず不安そうな顔をしている。まあ、それ以上に私が動揺しているのだが。

「えっと…聞いちゃいけなかったでしょうか？」
「あ、うん。じゃなかった、そんなことないよ。あ、そうだ！名字で呼ぶのはなんか堅苦しいから、僕…、もういいや、私のことは陽彩でいいよ」

とりあえず、話題を変えて誤魔化そう。

「えっと、そうですか？では陽彩さんで。…なら、私のことも司と呼んでください」

おお、乗ってくれた！これはうまく誤魔化されてくれるかな？
自分の名前を素直に読んでくれる彼女に何処か安心して私は小さくほっと一息。

「了解。それじゃあ司さん、これからもよろしく」
「…それで、実際のところはどうなのですか？」

まあ、そうだよね～。私をすごく興味津々で見てくる視線は変わらないもん。
私はどこか諦めたように、それでも最後の抵抗と言葉を紡いだ。

「ほら、どこからどう見ても男だよ。なんなら喉仏触ってもいいし。生物的分類は男！以上！それでも気になるなら、付け回してでも調べ

て良いから」

私は今までかぶったままだったフードを取り、そっと彼女に喉元を見せる。

あくまで喉仏だけ。他を見せたり、触られたりは、ただの変質者だし。

まあ、これだけ言っておけば少しは引き下がってくれるだろう…と、思ったのだけど。

「…良いんですか？じゃあ、付け回しますね」

待って、そっち!?喉仏じゃないの？

でも、よく考えたら彼女は最初あったときもそんな感じだった。

『よかったね陽彩。友だちが増えたよ？』

私の様子に心底楽しそうなユベルが恨めしい。

だけど、まあ、別に良いかと思えている自分がいる。

アカデミアを辞めてから、いやアカデミアの途中からずっと一人だったから。

だから、話し相手がいるのは悪い気はしなかった。

「あ…はい。なんだかすごいね司さん。…諦めます。好きにしてください！もう、私帰る！帰って一人祝勝会あげる」

「あ、私も参加していいですか？」

「…もう好きにして。…と言うか、流石にこの後家までついてこないよね？ＤＡＵＳ入学してからだよね？一応私男だからね？」

そう声をかけて彼女の声が帰ってこないのがなんとなく怖かった。

…なんで笑ってるの？

けど、まあ今は深く考えない。とりあえず、今は合格した喜びを祝

勝会と言う名の外食で発散しよう。
『ねえ、ユベル？何が食べたい？食べるの私だけど』
『あ、うん。現実逃避するのは良いけど、彼女バッチリついてきてるよ？』
『言わないで…。まあ、でも彼女は悪人じゃないよ。…デュエル好きに悪い人がいないから』
『自分のプレイングを褒められたからでしょ？陽彩は単純だから』

図星だ。だけど仕方がないじゃないか。本当に久しぶりに嬉しかった。
自分はこのデッキで戦っていてもいいって言われた気がしたから。
…よーし、もう開き直るぞ！

「ねえ、とりあえず何食べたい？今なら、もれなく私の奢りでいいよ。こう言うのは男子が奢るものだろうし」

一度言ってみたかったセリフをここぞとばかりに言ってみる。
最初は私のいきなりの変化に戸惑っていた彼女も、徐々に表情が柔らかくなり…

「あ…私ですか？私は…」

そうして、二人のデュエリストは試験会場を後にする。
最初はお互いどこか遠慮していた会話も、食事が終わる頃にはうちとけていた。
ただ、私はその時気づくことができなかった。そんな私を見つめるユベルのどこか寂しそうな視線に

試験中の賑やかさとは違って受験生が帰った後の静まり返った受験会場。
その会議室の一室、部屋に設置されたモニターには今日受験に参加した受験者の情報が表示されている。
その部屋の中ではＤＡＵＳの関係者が円卓の机を囲み、会議をしていた。

「それで、今回の受験生についてだが…、それぞれ何か気になる人物はいたかな？」

最初に口を開いたのは、この会議の議長だろう年配の男。
昔は真っ黒だった髪も今では真っ白に染まり、だが、その肉体は衰えを知らないのか回りにいる数人の試験官よりもむしろ体つきはかなり筋肉質で、威厳のこもった視線声で円卓を囲む参加者に視線と声を送る。
その言葉に答えるように、何人かの受験試験官を担当した人物が声を上げた。

「いやいや、今年は豊作ですね。ヒヤヒヤした相手が何人かいましたが…」
「伝説の彼を思い出させるＨＥＲＯ使い、そしてサイバー流の使い手なんかもいましたねぇ」
「私の担当では…、ええ可愛い男の子が何人か。あれはまた磨けばまた違う方に輝くと。あ、女の子は知らないです」
「…それ、デュエルのことだよな？君の言い方だと別の意味に聞こえるのだが」
「まあまあ、彼のあれはツッコミを入れるだけ野暮だよ」

それぞれ受け持った受験生の話題で盛り上がる。優秀な生徒が入ってくるのは講師として楽しみなのだろう。名前が上がった生徒はそれぞれ自身で話をしながらも、それぞれの資料にチェックを入れていく。

そんな和やかに過ぎていく場に、今まで黙っていた白衣を着た初老の男が場を制するように、咳払いをしたあと声を上げる。

「一つ、気になるデータが有る」

その男はこのＤＡＵＳでも、特殊な位置にいる人間。デュエル科学技術担当の男だった。

普段はただ退屈そうにこの場にいるだけの男。その男が声を上げたことで和やかに話しているだけの場だった会議室の空気が変わる。

「…と、いいますと」

議長が話を促すように声をかける。

「研究も兼ねて、デュエルディスクにデュエルエナジーを測定する機器をセットしていたのだが…」

「ああ、技術部が言っていた、現在も研究中のデュエルモンスターズで発生するエネルギー関連のですか」

「正確に言うと、強いデュエリストほど発生するエナジーが多いので、合否の指標になるかな～と思ってセットして見たんですけど。で、私はまだ全部チェックしていなかったのですが、何かあったんですか博士？」

同じ技術部の白衣を着た女子小学生、もとい技術部副主任が興味ありげに視線を向ける。

彼女も、数値についてはある程度チェックはしていたのだろう。あ

る程度なのはこの会議が始まる前まで音声解析をしていたからなのだが。

「…二人、おかしな数値を叩き出したデュエリストがいる」

「ほう、他と比べ、それほどまでに高い数値を？」

議長の紡いだ言葉、それはこの場に参加した全員が思った当然の質問だった。デュエルをすれば必ず溢れるエネルギーであるデュエルエナジー。それが際立った数値が出るとすれば、その量が多いと思うのが自然だ。

だが、続く言葉がそれを否定した。

「いや、逆だ。ほとんど感知できなかった」

一瞬辺りは静寂に包まれる…。少しして一人の男が沈黙に耐えかね声を上げた。

「…は？」

それに答えるように、先程の科学技術担当の男、通称博士が話を続ける。

「まるでデュエルをしていないように感知できなかった。いや、デュエルをしているのだから発生はしているのだろうが、感知する前にそのエネルギーが何処かに消えていた」

デュエルエナジーは未だに研究中のエネルギーだ。過去の記憶では時空に穴を開けたという記録もある未知のエネルギー。

その研究は人類の発展に大きく貢献するだろうことは明白で、各研究機関で現在進行系で研究が重ねられてはいるものの、全容については未だ謎。

そのエネルギーが消えるとなれば…

「…危険ですよね。博士、私思うのです。この際その受験者消しちゃうというのはどうでしょう？ほら、科学の発展には犠牲はつきものデースって、どこかの博士も言っていますし」

副主任の言葉に、会議参加者全員の厳しい視線が集まる。その視線に気づき、あははと作り笑いを浮かべながら。

「…冗談ですよ、冗談。逆ですよ。そんな人がいたなら、確実に技術解明の鍵になりますから。それに、かわいい入学生にそんなことしませんよ。疑いの視線を向けるなんて心外です！ぷんぷん」

「いや、みんな君のことは知っているから。正直その歳でぷんぷんはキツイものがあると…」

「…あ？」

円卓の片隅で不毛な戦いが起きているが、それを無視して議長の男が話しを促す。

「その受験者は？」

「受験番号１１９２番、藍沢陽彩。それともうひとり…」

発言とともに、博士は手元の端末を操作する。

同時にモニターには件の人物のプロフィール、デッキ内容が表示される。

その映像を見て一人の男と副主任が声を上げる。

「ほう…。」「あ!?」

「知っているのか？」

「私の事を小学生と言った一人！」

「…それは今はどうでもいい。君はどうなんだ？」

「…片方は私が受け持った受験者でしたから」
「何か変わったことはあったか？」
その男、藍沢を担当した試験官は、デュエルの様子を思い出し、少し考えるような仕草をした後に口を開く。
「…かなり特殊なデッキでしたが、本人はデュエルを楽しんでいました。あの状態でエナジーが出ないのは考えられません」
「ならば、機器の故障か？」
「だが、その同じディスクを使ったあとの受験者のエナジーについては感知できている」
「なら、何故？」
「それがわからんから、この場で議題に上げた」

博士の発言でまた場が静寂に包まれる。だが、それについて専門家の二人が何も言わないのだから、他のものに原因がわかるものがいる筈もなく。

「現状では原因不明ということか…。不正の線は？」
「それはないでしょうな。デュエルディスクを装着するまで時間もありませんし、そんなことをすればディスクの不正防止プログラムが起動する。一応は試験である以上、かなり強固なプロテクトを掛けてあった」

答える博士は淡々としたものだ。
議題を持ち込む前に博士自身がすでに調べていたのだろう、有無を言わさずそう結論付ける。

「…いくら議論しても、結論は出んか。ならばその生徒は要監視対象だな」
「監視…と言うのはいささか言いすぎな気が」
「だが、必要なことだ」

最初の和気藹々とした会議はまるでなかったかのように、その場は緊張感に包まれる。
少なくともここに参加した物皆がその必要性については理解しているのだろう。
有無を言わさぬその議長の発言に、異を唱えるものはいなかった。ただ
そんな中、
「それならば、彼は私が担当しましょう。それで何か分かり次第、報告を随時上げていきます。もう一人は…」
「なら、私が受け持っておくわ。彼もなかなかかわいい男子だし…。磨き甲斐もありそうだわ」
二人の試験官が名乗りを上げる。一人は藍沢の受験を担当した試験官。名前は古田という。
彼ならば問題ないと皆が判断したのか特に反論はなかった。だが、もう一人の試験官が声を上げたことに数人が難色を示す。
だが、他に立候補者がいない以上は仕方がないと、どこか諦めたように議長が承認するように口を開く。
「……途中退学させるような自体だけは避けてくれ」
そこには色々な感情が含まれていた。
もう一人の「彼」に目をつけられた生徒は少なくとも何かしらの実績を残していた。
実際指導者としては優秀である。…問題は、その性格と性癖。それを知っているからこそ周りの目は複雑だった。
ただ、これで終わりかと思ったこの話に、藍沢を担当した試験官から新たな燃料が投下される
「それと、藍沢について一つ気にになったことが…」
「なんだね？」
「昔、噂を聞いた生徒の名前なのですが、彼と同じ藍沢を名乗る。その

子は確か女子生徒だったのですが、もしかして彼は…」

会議は続く…当事者たちの知らぬ間に、様々な事態が思惑が動き出す。

会話に上がった生徒達も、この会議に参加したＤＡＵＳ関係者も知らぬところで、

円卓に仕込まれた小さな盗聴器、その受信先にいた人物が怪しく笑う。

幕間　私から見た陽彩さん。

デュエルアカデミアへと行き交う船が寄港する少し寂れた港町。
その片隅にある一見のボロアパートの一室。
そこが私、藍沢陽彩の城であり、自分の領域である下宿先である。

「……ふぁぁ……んっ……ねむ…」

何か物音がした気がした。
眠い眼を擦りながら私の意識はゆっくりと覚醒する。
…体がすごく怠い。それになんだかとても寝苦しい。何でだろう？
これでも私は、睡眠だけは優先してお金は使っていると自負している。
私の高級マットレス＆羽毛布団という組み合わせは、辛い仕事の後だって必ず私の疲れを癒やしてくれた。
それなのに、今日はどうしたというのだ？
枕の位置が悪いのかなと、ポジションを変えようとそっと目を閉じたまま手を動かすも、いつものベットの感触とは違うことに気づく。ペタペタと自分が寝転がっている場所に手をはわせるとザラザラした感触…ああ、これソファーだ。寝苦しいよねソファーって。

「……あれ？」

思わず声を出してしまったけど、これはどういうことなのだろう。
私はほぼ癖のレベルで、どんなに疲れていてもベットで眠るようにしている。
むしろ体が柔らかい寝床を求めているのだが…なら、何故自分は今ソファーで眠っているのか？
思い出そうとするも、昨日は試験に合格したことに浮かれ、燥ぎすぎて終盤の記憶は少し曖昧だ。

そっとゆっくり眠い瞳を開いて周りを見れば、最初はぼやけた視界ながらも、そこが間違いなく自分の部屋なのだとは理解できる。
視線を動かせば見慣れた風景。いつも通りのカードだらけのテーブル、いつも通りの無駄に調味料だけ揃ったキッチン。そして、女の子が寝ている自分のベット。

「……ん～？」

今、見えてはいけないものが見えた気がする。

『陽彩、あなたきっと疲れてるのよ。あなたの部屋に女の子なんていないわ』

そう心の中で、ユベルではない誰かが囁いた気がするが、私はもう一度視線を外して再度あたりを見渡す。
うん、間違いなく此処は私の部屋だ。そして、昨日知り合ったばかりの女の子が私のベットで寝ている…。

そうだ、これは夢だ。そうに違いない。よし寝直そう。

まったく、誰だよ！私の部屋に等身大抱き枕なんて置いたの！
私にはユベルがいれば良いんだから。
そんなふうに思い、もぞもぞと毛布を頭までかぶり、ソファーで眠ろうとする私にユベルは少し呆れたように呟く

『ねえ、陽彩…。夢じゃないから、いい加減起きないと後が大変だよ？』
『ユベル、大丈夫……これは夢、夢だから』
『そう思うならそれでも良いけど…このまま寝るならアルバイト休まないといけないよ？』

その言葉に無理やり眠りに落ちようとしていた私の意識がはっきりと覚醒する。
あ、やばい、アルバイト先に行かなきゃ。と言うより今何時？勢い良く状態を起こして時計を見つめる。
良かった、遅刻はしてない…ギリギリだけど。
アルバイトは大丈夫として、この部屋を引き払う手続きは後回しにするしかないか。大家さんは夕方ならいるだろうし…。これは後回しで大丈夫。
ああ、でもこういった場合って何か菓子折りをもっていったほうが良いのかな？
様々なことが頭の中によぎる。
うん、一つ一つ潰していかないと、私の許容範囲を軽くオーバーしている。
私は小さくため息をつくと、そっと先ほどまで見ないようにしていた自分のベットで寝ている彼女を見る。
うん、いるよね。やっぱり…どうしようか？

「起こすのは可哀想だけど…、いや、寝かしておいたほうが良いかな？…多分私がここまで案内したんだよね？」

私の問いにユベルが察したのか、クスクスと微笑を漏らしながら私に語りかける。

『ああ、やっぱり覚えてないのか。とりあえず、今は仕事に行ったら？詳しくは移動しながら話してあげるから』

規則正しく立てている寝息から、まだ眠りが深いと思って、私はそっと書き置きだけ机の上において、急ぎ着替えを済ませると部屋を後にする。
貴重品？デッキと財布と通帳は常日頃から鞄の中だよ。

騒々しい物音から数分、バタンという何かが閉まる音ともに、私はゆっくりと目を覚ます。
もぞもぞと温かい羽毛布団の中から手を伸ばし、近くにおいてあるだろう自分のメガネを探す。
コツンという指先に当たる眼鏡を間隔を頼りに、慣れた手つきでそれを掛ければ、ぼやけた視界が徐々に鮮明になっていく。
ＤＡＵＳに入学する為にこちらに来て、久しぶりにゆっくり眠った気がする。
このまま惰眠を貪りたい衝動に駆られるが、今の私が何で布団の中にいるのか思い出さなければいけない。
確か、寝る寸前まで誰かと…そうだ

「私は…ああ、確かあの後、合格祝いのブランデー使ったお菓子に酔った陽彩さんが…」

上体を起こし、観察するように辺りを見て、現状を確認するように言葉にする。
私以外人気のないその部屋、どうやら家主は既に出ているらしい。
不用心だなとは思いつつも、きっと私のことを少し案じてくれたのだろう。
そっと机を見れば小さなメモ帳に
『鍵は外の再生野菜ネギ3号の植木鉢の下に。後、朝食食べるかわからないけど、近くのパン屋さんのドローパンがおいてます。よかったら食べてね！』

可愛らしい字で書かれたそのメモを見て、私はくすりと思わず笑ってしまった。
不思議な人だ。
そう、不思議な人。
私はベットの縁までもぞもぞと移動しながら、ゆっくり足をおろしそのまま縁に座る。
せっかくだからと、行儀が悪いとは思いつつテーブルの上に乗った不透明な袋に入ったパン、多分これがドローパンだろう、手を伸ばせば、袋を破ってそっと小さく一口。
「……美味しい」
パンの中身はタマゴで、かなり手が込んでいるのかパンの中に入っているのに、焼きたてのようなふわふわ感と深い旨味が口の中いっぱいに広がる。
私はゆっくりと味わいながら昨日の出来事を思い返した。

古い歯車が軋む音を辺りに響かせ、その時轟音が会場内に響いた。
音の発生源、巨大な機械の右ストレートによって、私のモンスターは粉微塵に消し飛ばされる。
実際には感じないはずの激しいその余波に自然と体がのけぞる。
モンスターの攻撃力を大きく超えたその攻撃によって私のライフは削りきられ、同時に辺りに展開していた歯車だらけの街と相手フィールドのモンスターは細かな粒子となって消えていく。
「…ありがとう、ございました」

試験は私の敗北でデュエルが終わる。
湧き上がる悔しい気持ちをなんとか抑え、私は対戦相手だった試験官に小さく一礼をする。
これも試験である以上、デュエルの後の態度も採点の対象になるだろう。
それでも、私は顔を上げ、対戦相手の試験官の顔を見ることができなかった。
一礼の後俯いたままの私は、その場を離れようと歩きだす。
そのままデュエルフィールドを離れようとしたそんな私に、試験官は声をかけてきた。

「君は何を遠慮している?」

俯きながら聞こえた声に、ビクリと一瞬体が震える。
最初は私のおどおどした態度に対して言っているのだろうか?そんな風に思ったが、すぐに先程のデュエル内容を思い出す。

「…そんなこと無いです」

じっとこちらを見る試験官の視線を感じ、少しだけ怖気づきながらも、私はそう答えた。
正直男性は苦手だった。ＤＡＵＳの受験のために故郷を離れ此方に来てから、私は色々なことを経験して、なお一層そういった苦手意識がついた気がする。
だからこそ、話を切り上げようと口にしたその言葉も嘘だった。
あの場で更に展開することはできた。そうすれば今の結果が変わっていたかもしれない。
それでも、それを負けた後に考えても意味がないし、試験である以上この結果が全てだ。
俯いたまま言葉を返し、その場を離れようとした私になおも続けてその試験官は私に問いかける。

「…まあ、何か理由があるのか知らないが、君がそう言うならそういうことにしておこう。ただ、これだけは言わせてもらう。試験官としてではなく、一人のデュエリストとして」

離れようとする私に構わず試験官は言葉を続ける。

私はなんとなく早足にその場を去ろうとするも、周りの喧騒の中、試験官の言葉だけは何故だかはっきりと聞こえた。

「デュエルは楽しむものだ。今は負けて悔しいからかもしれないが、君はデュエル中、楽しんでいたか？」

デュエルは楽しむものだ。

私だって知っている。

楽しむため、強くなるために、その為にここに来たのだから。

でも、今の私はそれができない。

自分の全力を出すことが許されない。『自分のエースを出してはいけない。』

それは此処に来るために交わした約束で、それがあるから私は今この場に立っていることができるのだから。

それがモヤモヤとした何とも言えない感情になって、それでも感情を表に出さないように精一杯抵抗した後、ふぅっと深い溜め息を一つ。

落ち着いたわけではないけど、少し周りを見る余裕だけはできた。

周りの観客は既に先程までデュエルをしていた私には興味が無いのか、私を見ている視線は皆無だった。…皆が期待しているのは次の対戦相手だろう。

目立ちたくない私としてはありがたいことなのだけど、少しだけ心の中で思ってしまう。

『もっとすごいデュエルだったなら、みんなの知らないカードを出せば、見てくれる人がいたのかな？』

それはきっとデュエリスト冥利に尽きるのだろう。目立つことで恥ずかしいとは別の誇らしさがあるのだろう。

「次の対戦相手は受験番号１１２９、藍沢陽彩。呼び出しをお願いします」

先程、自分を倒した試験官が次の対戦相手の名前を読み上げ、インカムを使い呼び出しを行う。

次いで会場内に流れる放送音声に、このフィールドの周りにいた数人が少しざわめいた。

「藍沢?…何処かで聞いたことあるな」

「お、有名なやつ?」

「いや…どうだったか」

何やら囁かれる周りの声に、自然とこの場を離れようとした私は足を止めた。

ちょっとした好奇心…といえば良いのだろうか、何となく自分を負かした相手の次のデュエルが見て見たくなったから。

ゆっくりと視線を先程まで自分がいたデュエルフィールドに戻すと、ちょうど一人の人物が人混みを抜けて手を挙げて前に出てきた。

「あ、はい!受験番号１１９２。藍沢です!」

現れたブカブカの黒いパーカーを着たその受験者は、背格好や体格から最初は女の人だと思った。

番号に次いで呼ばれた名前からも、男女区別しづらい名前だったから。

私の第一印象はただの変わった人。それ以上でも以外でもなかった。

先程の雑談が聞こえなければ、この会場にいる、大勢多数のただの

一人だっただろう。
少し有名な人なら強いだろうけど、私だって全力を出せないまでもかなり頑張って戦った上で完敗したのだ。
きっとあの強い試験官にやられてしまうだろう哀れな受験生の一人になるんだろうな。
出来れば、すんなり負けてほしい…。
私がここに合格するためには、やっぱりライバルは減ってもらいたい。
…駄目ですね。そんな考えになってる段階でデュエルを楽しむことなんて。
だけど、そんな自分でも良くないと思う感情でデュエルを眺めていた私の期待を、彼はすんなりと裏切ってくれた。
「…デッキ破壊です？いや、でも…あの伏せモンスターは…」
最初は単なるデッキ破壊特化だと思った。いや、単なると言うよりは、かなり強力なデッキ破壊戦術だったが。
だけど、そう思った私の期待は見事に裏切られ、それをブラフに相手に展開を急がせ、反射ダメージでとどめを刺そうとした。
多分彼だけでは、そのデュエルは一方的なものになっただろう展開だった。
ただ、相手は私を封殺した試験官で、彼も只者ではない。
すかさずその思惑をすべて読みきった上での試験官の反撃が決まる。
私なら、多分諦めていただろう。
少なくとも私のデッキではあの場をひっくり返すことはできない。
たとえ切り札を使ったとしてもだ。
それでも、彼は楽しそうに続けた。
決まらなかったときの彼の悔しそうな表情は忘れない。
圧倒的なライフ差それでも彼は諦めなかった。とんでもないデッキを回してみせた。

短いターンの中に色々な攻防が繰り広げられ、お互いの攻防に私はいつしか目が離せなくなっていた。
何よりも、最後の最後まで粘って、それでも負けたのに自分の全力を出し切ったそんな顔で笑う彼に、デュエルを終える頃にはどこか憧れてしまっていた。

彼と一緒にいたら、あんなデュエル私にもできるだろうか？
デュエルが終わり、試験官と何やら話した後、そっとひと目を避けるように歩きだす彼から私は視線を外すことができなかった。
このまま、見ているだけでいいのだろうか？
傍観者でいて良いのだろうか？
そう思った時、私は行動せずにはいられなかった。

「あの、試験でのあのデッキ…」

我ながら、第一声としてはひどいと思う。けど、何かキッカケがないと話は続かない。
だから私は、精一杯勇気を出して声を上げた。

「私、日本語分からないノーネ」

体は強張った。根本的に私は怖がりで人見知りだ。
遠回しに私に話しかけないでと言っているのはわかる。
それでも、私は彼と少しでも話したいと思った。

「え？あ、あの！…あ、ちょっと、待ってください！」
「待たないのでアール」
「…待たなくてもいいので、これだけは言わせてください」

歩き去ろうとする彼の前に私はいつの間にか立っていた。
無意識だったけど、もうこれで逃げ道はなくなったな…なんてどこ

か他人事の様に思っている自分がいる。
じっと、フードの中覗き込むように彼の目を見た。…その時の彼の冷たい視線は忘れられない。
きっと嫌われたな、なんて思いつつも印象に残ったのなら、覚えてもらえるのなら0ではないと、折れそうになる心をなんとか奮い立たせる。
…これだけは絶対に伝えたかったから。

「…すごかったです！あんな風にメタモルポッドでデッキを回し切るの」

冷たい表情も忘れないけど、それ以上にこの言葉を言った後の彼がその日一番印象に残った。
最初は、そのまま無視されるのかと考えていたけど、見ていると押し黙ったまま彼の表情はコロコロ変わる。泣きそうだったり、嬉しそうだったり、色んな感情が溢れ出そうなのは伝わった。
ただ、何故そうなったのか、その時の私はすぐに気付けなくて、少し困惑気味に彼を見ていたが、ふいに自分の手に暖かな感触を感じ視線を下げる。
気がつけば取られていた手に『え？』驚き彼をもう一度見れば、そこには先程のデュエル中と同じような楽しげな笑みを浮かべた彼の姿があった。

「わかる？これも愛のなせる技だよ！」

これが、昨日の出会い。忘れられない出来事の始まり

幕間　出会い

「それじゃあ店長。長い間お世話になりました」
そう言って頭を下げる私を見ていた眼の前の男性。私のバイト先、そのカードショップの店主は、どこか複雑そうな表情を浮かべていた。
急にアルバイトをやめると言われたのだから、当然といえば当然な反応だろう。
でも私だってＤＡＵＳ受験合格まではいいのだが、まさか一週間後に現地集合など私も想像だにしていなかったから仕方がない。
確かに今は受験シーズンも佳境に差し掛かる時期ではあるが、それでも早すぎるんじゃないかな？なんて資料を読みながら思ったが、それでもそれが現実だと受け止め、アルバイトの合間に店長に話しかけ今に至るわけで。
「ああ、少し急だがご苦労様。もともと合格したら入学までという話はしていたし、それが少し早くなっただけだ。良かったじゃないか、また戻ることができて」
そんな私の勝手な都合にも関わらず、優しい声色で返してくれる店長にどこかホッとした気持ちで、私は笑みを返す。
「ええ…まさか、私がまたあそこに戻るなんて今でも信じられないですけど…。けど、戻る以上は全力で、です。ほらほら店長、私が有名なプロデュエリストになったら、このお店のこともバッチリ宣伝しますから、最後のお給金に色を付けてくださってもいいんですよー？」
「はは、なら少し期待させてもらおうか」
「え？本当ですか？よーし、私頑張っちゃうぞー」
そんなたわいの無い冗談を言いながら、私はもう一度頭を下げすぐ仕事に戻る。と言っても、少し寂れた港町の小さなカードショップ、お客さんも今はいなくて、陳列されているカードを整理したりするだけなのだが。
「…本当に、色んな意味で変わったな君は。まあ、そちらのほうがお客さん受けもよかったが。…最近は評判も良かったし、うちとしても続

けてもらいたかったんだけどね。何があったかはしらないけど、もっと早めにそうなってくれてたらうちももう少しお客さん増えていたかもしれないのに」
　そんな私を見ながら、店長はどこか懐かしむように言葉を続けた。
　変わったという言葉に、少しだけどきっとする。やはりずっと見ていた人にはわかるのだろうか？これでもうまく猫被って空元気で頑張っていた自信はあったのだけど。
「まあ、それは色々あったとしか…。でも、感謝です。正直私って雰囲気そんなに明るくはなかったと思ったのですけど、それでもずっと雇っていてくれて」
「…あのときの君は、放っておくと何処かにいなくなってしまいそうだからね」
　誤魔化すように微笑みながらつぶやいた言葉に、店長は核心を突くようなそんな言葉をぶつけてくる。
　何ていうか恥ずかしい、そんなふうに見えていたなんて。
「ん…あはは、そうですか。そうかもしれませんね…っと、そうだ、最後にデュエルしませんか？ちょうど今お客さんもいませんし」
　だから、私はそんな恥ずかしさを誤魔化すように、私は店長にデュエルを申し込む。
　ちょっと前まで言い出せなかった言葉。だけど今は踏ん切りがついて言えるようになった言葉。
「そう言われるとお客さんが少ないみたいで、店としては悲しいものがあるのだが…。それにしても、君がデュエルを申し込むなんて初めてじゃないか？いつもはお客さんの子供にせがまれてもほとんどデュエルしなかった君が」
　そんな私の言葉に一瞬店長は驚く。そんなにおかしな言葉だったかな？っと思ったけど、よくよく思い返せばそうだったと納得してしまう自分がいた。それでも応じてくれるのかカウンター裏に保管してあった店長自身のデッキを手に取り…
「あ、いや…それには複雑な理由が。うーん、でも詳しくはデュエルすればわかると思いますよ？申し訳ありませんが、勝たせてもらいます

！」
　そんな自身の心の声と店長の言葉に返すように答えれば、私も自分のデッキをケースから取り出した時
「それは楽しみだ。負けるつもりでデュエルをする人なんていない以上、私も全力で答えないといけないな」
　店長のその一言に胸が高鳴る。
　全力？全力といいましたね、店長？なら、私も持てる力を全て出さなければいけないですよね？ええ、もちろん答えは聞いていませんとも。
　ここでもし、楽しいデュエルを！なんて言われていれば、少し構築を変更したデッキを使っていたかもしれませんが、そう店長が望まれるなら私も全力です。
　そして、私は知っているのだ。店長のデッキがただのデッキではないことも。
　アカデミアから寄港する船から時折この店に運ばれる荷物の正体、アカデミアで研究された新しいカードを。そして店長がそのモニターをしているのを。
「……なんだか、すごくいい笑顔で笑ってるね。少し怖いんだけど」
　怪訝そうな顔で店長が此方を見ていた。…そんなに私表情に出ていたのだろうか？
「そんな細かいことはいいんです！さあ、デュエル、楽しいデュエルの始まりです」
　私はまた誤魔化すように早口でそう言って、店に設置されたプレイエリアにシャッフルしたデッキを置く。そして、店長からもシャッフルしたデッキを受け取れば、もう一度互いのデッキをシャッフルする。
　デュエルディスクでオートシャッフルもいいけど、こうやって自分の手でデッキをシャッフルするのも楽しいものだ。カードが傷つかないように気をつけなければいけないが、基本的にカードは丈夫だ。カードは丈夫だ！
　それにデュエルディスクにセットしてシャッフルすれば自動であ

る程度の傷なら補修してくれる。…ＫＣ社脅威の技術力である。
「さて、お互い準備ができたみたいだし、早速始めようか。お客さんがいつくるかわからないからね」
「ええ、邪魔はされたくないですし、いっその事表にｃｌｏｓｅｄの…」
「はい、君減給ね」
「冗談ですよ！では…」
「「デュエル！」」
宣言とともに、先攻は店長に譲り、お互いにデッキからカードをドローする。当然のように手札に来ているメタモルさんをまずどう動かすか考えながら、もう一枚の自分の新しい相棒のカードに思わず笑みが深まる。
…そういえば、ユベルと出会ったのもこの店から帰ったあとだったっけ。店長が場にカードを伏せるのを見ながら、私は何気なしに思い出した出会ったあの日のことを考える。

その頃の私は、なんというか今思い出しても空っぽという言葉がぴったりだった。
自分の意志でデュエルアカデミアをやめ数年、あれだけ熱望し入学することができたデュエルアカデミアを辞めたなんて両親に報告できるわけもなく、私は生まれ故郷には帰れずに未練がましくもアカデミアの船が寄港するこの港町に住んでいた。
…私は今何をしているのだろう？
漠然と浮かぶ問いに答えられぬまま、只々日々を生きるためのお金を働いて稼ぎ、食事と住居を確保する。そうやって続けてきた最低限の生活。楽しみといえばカードショップの子どもたちとの会話だった。楽しげにカードの話をする子どもたちが微笑ましくて羨ましく

て…少しだけ妬ましくて。そんな子どもたちを、どこか作り笑いを浮かべながら見つめるそんな毎日を過ごす日々。
後悔しているかといえば、もちろん後悔している。でも、あのまま続けることも私にはできなかった。
そうだ、私は逃げたのだ。
大好きなデュエルから。
だから帰れない。帰ってはいけない。
そう思い込んでいた、そんなある日

「慣れた道だろうけど、夜道は気をつけて帰りな。一応女の子なんだから」
「一応って少しひどい気がしますけど…、けどお疲れ様です」

ショップ大会の後片付けもあり、少し遅れたバイト帰りの他愛もない店長との会話。
気遣ってくれているのは理解している。それでも、どこか気のない返事をしてしまう自分が嫌になる。
小さく会釈して、店を出た私はいつもどおり自分の部屋に帰った。
それだけならいつもの日常だったのだけど、その日は少しだけいつもと違っていた。
鍵を開け、部屋に入ろうとした時少しだけいつもと違う違和感を感じた。
そっと、違和感の主を探すように視線を動かせば、郵便受けにダイレクトメールや広告以外の物が入っていた。
「…誰からだろう？」
この場所は親にすら伝えていない。訪ねてくる人といえば、管理人さんと宗教関係の勧誘、後は新聞屋さんぐらいの郵送とは無関係な人たち。
知っているとすれば、退学後にいろいろな手続の書類を送ってもらうために知らせたアカデミアぐらいだろう。もちろん、バイト先の店長はしっているだろうが、それなら手渡しで済むので除外だ。

だったら誰から？怪訝に思いながらも、手に取ったその小包の差出人を確認して、私はさらに困惑した。
「海馬…ＫＣ（海馬コーポレーション）!?…何で私に？」
疑問が残るがとりあえず部屋の中に入った私は、机の上に小包を置く。
自分とＫＣ社の関わりといえば、自身がアカデミアに通っていたことと、自身の両親が関連会社に努めているぐらいだろうか？確か何かの研究施設とか。…流石に業務に係る内容なので教えてくれることはなかったけど。
だから、両親から何かがアカデミア経由で届くことはあるかもしれないが、ＫＣから直接私に何か届くとは考えづらい。
「よく見たら発送日がけっこう前だ。最初の宛先がデュエルアカデミアの私の寮になってるし。…それが巡り巡って今日届いたのか」
きっと、自分がいた部屋を使っていた人のところに一度届いたのかもしれない。それを調べてアカデミア側が送り直してくれたのかな？ごめんなさい、辞めてまでご迷惑をかけてしまったデュエルアカデミアの名前も知らない生徒さんと事務の人。
私は一度心のなかで届かない謝罪をすれば、よしっと小包の包装をゆっくり丁寧に剥がす。
包装の中身はよくあるダンボール。その中にはまた封筒と、両親の物だろう手帳と厳重に封がされたカードケース。
「…カードが見たいな～。けど、先にこれが何か見ないといけないよね？」
カードケースを開けたい衝動に駆られるが、フルフルと一度頭を振りその欲求を振り払う。とりあえずは先に封筒を開き、中にはいった手紙を取り出し、何気なしに目を向けた。

その瞬間のことは、私も正直よく覚えていない。

私が落ち着いた時、少し暴れてしまったのだろう散らかった部屋の中、ただただ蹲って泣いていた。
最初は理解が追いつかなかった。それぐらいそこに書かれていた内容は衝撃的で、受け入れることができなかった。
この手紙に書かれていたものは端的に言えば訃報だった。
曰く、両親がカードの研究中に行方不明になった。
曰く、箱に入っている手帳類は、全てチェックしたが発見につながるものがなかった。
曰く、カードケースにはいっているのは両親が個人的に研究していたカード。
他にも細々と、両親に対する対応が書かれていたが、そこまで私は読む気にはなれなかった。
何でこんなことになってしまったんだろう?答えてくれる人は誰もいない。だって此処には私一人しかいないのだから。
「ふふ…はははは…」
いつもたった一人の自分の部屋。只々私の笑い声だけが響いた。
慣れていたはずの孤独なのに、自分が本当にたった一人になったと自覚するとどこまでも静かで、世界には自分しかいないような錯覚すらしてしまいそうだった。
いや、現実は少し前には親もいなくなり、私はとっくの昔に孤独になってしまっていたんだ。
それに気づかなかっただけだ。なんて脳天気だったのだろう。…気づきたくなんてなかった。
「嫌だな…一人は」
一人が嫌で、人が離れるのが、嫌われるのが嫌でアカデミアを辞めたはずなのに、気が付けば自分からまわりの人を遠ざけて、その結果本当に一人になってしまったなんて笑い話にもならない。いや、詭弁だ。私は只々逃げ出しただけだ。そこで戦い続けようとは思わなかった臆病者だ。そうだと再認識してしまったからだろうか、私は考えてしまった。このまま何処かに一人でいってしまうのもいいかもしれないなんて。…またこの現実から逃げ出してしまえと。

どうせ私は一度逃げているんだから。
「…でも、勿体無いな。私のデッキも、見たことのないカードも、私はどうでもいいけど、カードだけは誰かに使ってほしいな…」
逃げた私にはこの子達を使う価値はないかもしれない。自分よりももっとふさわしい使い手がいるはずだ。少なくとも、持っているだけでデュエルをしない私の所にいるよりもいいだろう。だったらいっその事、アルバイト先の店長に渡してしまうのもいいかもしれない。もしくは、頑なにデュエルをしない私にそれでもデュエルを挑んでくる常連の男の子か。あの子には、最後ぐらいデュエルしてあげても良かったかな。
ああ、ダメだ。未練がある。
『…だったら最初から逃げなきゃいいのに』
そんな時、不意に声が聞こえた気がした。その声はどこまでも平坦で、だけど確信にふれる言葉を私に投げかける。
『君はこのままでいいのかい?』
なおも続くその男とも女ともとれない声、普段の私なら幻聴だと病院に駆け込んでいたかもしれない。けど、今は幻聴でも話し相手が欲しかった。孤独でいるには心が耐えられなかった。
「嫌だ。戻りたい。…ううん、戻っても今のままならきっと一緒だ。私はきっと変わりたいんだ。そして、またもう一度、誰かと全力でデュエルしたい。デュエルで会話がしたい。でもまた私の周りから離れるのは辛い。誰かと一緒にいたい。もう離れたくない」
だから私は何も考えずに思うままにその声に答えた。
『…なら、僕が一緒にいてあげるよ』
「それは、どういう?」
私がそれに返そうとした時、異変が起こった。不意に体から力が抜けていく感覚、ふらつく身体をなんとか倒れないように、心を強く持つ。
体中を脱力感を感じながらも、意識だけはちゃんと保ち、揺らぐ視界が定まった時、私の目の前に彼は現れた。
『こういうことさ。ふふ、やっぱりイメージでも身体があったほうが

いいね。』
　目の前に現れた相手の姿を一言で表すなら、男女（おとこおんな）だ。身体の右半身が女性、その反対の左半身は男性の体をしていて、肌の色も人ではありえないほど赤黒く、左右で異なる髪色、中性的な顔立ちの中で瞳色はそれをさらに際立たせる。…まあ、それだけなら私を驚かせようと仮装した人という可能性もあるのだが、彼（仮称）の背中から生えている羽がパタパタと動き、ほんのり彼が浮いているのがみえる。
　ついに私にも見えてしまってはいけないものが見えてしまったかななんて思っていると。
『残念だけど、これは現実だ。君の両親がいなくなったのも、カードの僕の声が聞えるのもね』
　これはもしかして、相手に心を読まれている？それにカードって。
　そう思ってあたりを見れば、小包の中にあったカードケースを見る。その中には今目の前に現れた彼と同じ姿のカードが一枚あって…心なしか光ってる気がする。
「あの…」
『ん？ああ、流石に驚いているのかい？僕をイメージだけとは言え、視覚化できるだけのデュエルエナジーを潜在的に持っているのだから、こういったものには慣れていると思ったのだけど』
　すんなり彼はいうけど、理解が追いつかない。視覚化？デュエルエナジー？はっきり言って聞いたことが無い言葉だらけだった。
「えっと、よくはわからないけど、私があなたに姿を与えているの？」
『端的に言えばそうなるね。まあ、僕が勝手に君からエナジーを奪っているだけなんだけど』
　なんだかとても不穏な言葉が聞こえた。というよりも先ほどからごっそりと体の力が抜けたのはそういうわけか。つまり彼は
「それじゃあ…私はこのままそのエナジーを吸い取られて、貴方が実体化するための生贄になるのかな？」
　それならば彼の言葉は納得できた。いうなれば、私は彼に姿を与えるためだけの存在になるということだろう。私を生贄に彼をアドバ

ンス召喚？うんしっくり来る。…でも別にいいか。カードのためになるなら、それはそれで私としては嫌ではなかったから。だけど
『…物騒なことを考えてるね。嫌なことがあったのはわかるけど、僕がそんなことするように見えるかい？』
「すいません、今現在進行形で体が怠いのですが。あと…見た感じ悪魔なイメージなんだけど。私としてはかっこかわいいから嫌いじゃないですけど」
　むしろ私の趣味にどストライクなのだ。だからだろうか、目の前に現れた彼のことを怖がらずに話を聞いていられるのかもしれない。
『人と大事な話をするときはちゃんと向かい合って話し合うのが君たち人間なんじゃないのかい？だから、これは必要な犠牲だよ』
　今犠牲って言ったぞこの人？でも、きっとそのあたりを問いただしても流される気がする。というよりも、誤魔化すように笑う顔がかわいくて、じっと見てしまっていた私がいた。
　そんな自分に気づいて少しだけ視線をそらすように私は俯いてしまう。
「…それで、大事の話とは？」
『さっきも言ったとおり、僕が君のそばに居てあげるよ。そのかわり叶えてほしいことがある。というよりも、僕の声が聞こえたのは君が初めてだからね。もし仮に君が断っても相性が良さそうな君の体と心を乗っ取って、操るつもりだけど』
「そんなことができるなら、私に声をかけずに、そのまま身体を奪えばよかったじゃないですか？私が両親の事を知る前に…」
　なおも微笑みながら話す彼に私は当然の疑問を口にした。むしろ、そうしてくれたならどれだけ私は救われたのだろうか。そんな私の感情を読み取ってか、少しだけだが彼の表情が変わった。
『それはできないね。いや、出来なかったというべきかな。君が僕の声を聞こえるようになったのは、君が両親のことを知ったからだ。…君の心の中の闇が現れたからこそ、僕の言葉が君に聞こえるようになった。少なくとも僕はそう感じた』
「そんなのって…」

『ああ、ひどいと思うよ。でも、僕はそういう存在みたいなんだから仕方がない』
　変わらず口調は淡々としたものだけど、確かに少しだけではあるが彼から同情されているのはわかった。なら私が、彼に全部奪われないのは
「…じゃあ、私があなたの存在を認識できるようになったのに、未だに身体を奪わなかった理由は？私の境遇に同情しているから？…それなら、ひと思いに奪ってくれたほうがいい。そうすればきっと楽になれるかもしれないのに」
『それじゃあ、君はまた逃げるんだね』
「…違う！だって、貴方にとってチャンス何でしょ？私は貴方なら別にいいかなって思ってる。本当に一人になったと思ったときに声をかけてくれたから。それに、それはきっと結果的に私も変われるってことだから」
『それは言い訳だよ。自分でもわかっているくせに』
「そんなことは…」
　無いなんて言えなかった。わかっている。私は臆病なだけだ。それを認めたくないから楽な方へ楽な方へと、考えることを辞めてしまっているだけ。でも結局は自分から行動しなければ変わったなんて言えないのに。
『少なくとも、僕には君と話す理由があった。言っただろう？僕の言葉が聞こえたのは今まで君だけだったんだ。それまで僕はずっと独り。こうやって話せる機会が来るなんて思っても見なかったよ。イメージとは言え体を手に入れることもできるレベルの素質がある子がさ、勿体無いじゃないか。だから少し話してみたいと思ったし、君をどうにかしたいと思った。君という存在は僕にとってもチャンスなんだ』
　そこまでいって、彼は私の顔をその左右で色が違う瞳でじっと睨みつけてきた。
「…といえば聞こえはいいけど。僕はね、それだけ恵まれていることにも気づかないで、まるでそれだけのことで世界の終わりみたいな顔

をしている君が気に入らなかった。失う辛さってさぁ、それを持っている人だけが味わえる苦しみだよ。ああ、イライラする』

その言葉で、何となくだけど少し彼が理解できた気がした。彼は少し私に似ている。だけど決定的に違う。自分という存在を認識した時から自分を感知できる存在が周りにいなかった。自分だけは関わることもできないまま周りだけが変化していくのをただ眺めるだけの終りが見えない時間。それは想像するだけできっと地獄だろう。私ならどうだろうか?もしそんな時間がずっと流れて、その果てに自分の声を存在を理解できる、関わることができる人物が現れたら。だけど、そんな人物が目の前で今の私みたいなことを言ったなら。

「…ごめんなさい。なんて言ったら、きっと貴方は私の事もっと嫌いになるね」

思わず出た言葉、けど、これで終わらせてはいけない。そう思って続いた言葉私はじっと彼の瞳を見つめる。その様子に興味深そうに彼も私の続く言葉を待っていてくれた。

「それは嫌だ。私は私のそばに居てくれる人に嫌われるのは嫌なんだ。…なら私は前に進む。それにさ、私にはきっと拒否権がないんでしょ?だったら、少しでも前向きにね。ゼロに戻ったならあとは上がっていくだけだし」

『はは、いいね〜、やっぱり人は足掻いている姿が一番いいと思う』

「なんだか、すごく嫌な風にいうよね。でもさ、私はちゃんと知らないといけないと思う。両親がどうなったのか。……というか、あなたは知らないのかな?私の両親がどうなったか」

とても楽しげに笑う彼は、一緒に入っていた手紙には彼は両親が研究していたカードだと書かれていた。

ならば知っているのではないか?そう思うと少しだけ希望が見えた。

本当にちっぽけだけど。だが

『残念だけど、僕はその瞬間は其処にはいなかった。そんな事故現場にあったカードが君のところに簡単に届くと思うかい?』

「…それもそうか。いや、貴方が嘘をついてる可能性もあるか」

『そう言うの本人の前でよく言うよね。そういう所は嫌いじゃないよ。それと貴方は他人行儀だから、僕のことはユベルと呼んでほしい』
「なら、ユベル。ユベルはどうして私の両親が研究してたの？」
『あ～…、それについてはなんと言えばいいのか』
　此処で初めて彼の言葉が止まった。
　何かあるのだろうかと、私はその彼の考えている表情をじっと覗き込む。
　うん、やっぱりかっこかわいい。オッドアイなんて人で見るのは初めてだ。…いや人ではないけど。それでもとっても綺麗で見つめていると吸い込まれそうになる。あと、彼の声もハスキーボイスでとても私好みだ。
　…待てよ。そういえば彼はイメージと言っていた。カードに書かれている姿を私の、えっとデュエルエナジーだっけで、形にしたと。それならば私の嗜好も影響している可能性がある。つまり、私の心にドストライクな姿で現れたと…なんて悪魔的なんだ。これじゃあ何方にしろ彼の頼みは断れないじゃないか。
　ユベル考えている合間に雑念が現れては消えていく。そんな私の心を読んだのか、ユベルは私を何処か引き気味に見ている視線に気づいた。
『色々考えているようだけど、これは僕の元々の姿だよ。君の嗜好には影響されてない。それだけは確信を持って言える。それで、だ。僕のことについてだね…それが僕の叶えてほしいことの一つ。僕はね、自分自身の記憶が殆ど無いんだ』
「記憶がない？それは…」
『僕が僕を意識できるようになった時には、既に君の両親か、まあ何処かの研究施設にいたんだ。認識できたのは僕がユベルという存在であること。カードの精霊であること。それだけだよ』
　うん、また良くわからないことを。カードの精霊…実しやかに都市伝説として語られていた存在が目の前にいるとは。だけど知識として最低限のことしか無いとなると…

「…それは、ユベルがその研究所で生まれたカードだからじゃないのかな？」
　それならば納得できる、作られたばかりのカードならそのあたりの知識がない可能性もある。だけど
『もしそうだとすれば、彼らが僕を調べる必要なんて無いだろう？』
　そのあたりは彼も考えていたようで、きっぱりと否定された。
　どう考えても、それが一番辻褄が合うんだけど、最もな意見を返されれば納得するしかなかった。
『僕は自分が何者か知らない。だからさ、君には僕がどういった存在なのか調べてほしいんだ。それが僕の叶えてほしいこと。その為に僕はキミと一緒にいる。たとえ君が嫌と言ってもね』
　やっぱり最初から拒否権なんて持たせてくれない。これで逃げ道は塞がれた。悪戯っぽく笑う彼が有無を言わせずそう迫ってくる。いや、違うな、これはきっと彼なりの思いやりなのかもしれない。逃げ道を塞いでくれた。私がこれ以上逃げないように、意地でも前に進めるように。
「…それは、少なくとも私の両親を調べることにも繋がるから、私としては願ったりかなったりだ。ならよろしく、私の名前は藍沢…」
　私が自分の名前を言い終わる前に、ユベルは何かを思い出したように、ぽんと小さくてと叩くと、私の手を掴み。
『そういえば、君は変わりたいと言っていたね。なら、とりあえず君には少しだけ僕の力を貸してあげよう」
　そう言うと、目の前のユベルが消えた。そして不意に身体を乗っとられるような、何かが体の中を満たしていく感覚…ちょっと待って、あのユベルさん？まさかとは思いますが。
「さてっと、やっぱり生身は別の感覚だ。けど馴染むね。君の身体も僕に体型が近いからかな？」
　あの、私の口で、私の声で喋るのは構いませんが少しお話を聞いていただけますか？
「少し静かにしてて。僕も初めてだからうまくいくかどうか…っとちょうどいいのがある。これなら君と相性が良さそうだし』

私の制止を聞かず、ユベル私の部屋のカード入れを漁る。そして私のカードプールから一枚のカードを取り出し…そのカード名を読み上げた。
「マジックカード『突然変異』発動！」
狭い部屋の中で、私が発したのではない私の声が響く。
もし、こんな状況でなければその行動はデュエルもしていないのに何をやっているんだろう？で済むのだが、私の直感がこの状況が不味いと言っている。というよりも、宣言と同時に身体からまたごっそり力が吸い取られていく感覚と、なんだか身体がムズムズする感触に小さく声が漏れる。
『どうだい？とりあえずこんな感じかな。変わりたいと言ってたけど、急激に変わると流石に君の体が持たないからね。まずは外見から』
ゆっくりとまた自分の目の前に現れたユベルが微笑みかけてくる。やっと戻った身体の自由に小さく安堵しつつも、力が入らない身体でペタペタと私は自分の身体を確かめる。
無い、これは元々だけどもっと無い、それにこれは…有る、有る…ってなんで？待って、これはもしや。
「ユベル…少しお話しようか。」
自分の喉から出た声にやはり違和感を感じる。そう、いつもよりも低い声。先程触れた喉にあった違和感の正体それが指し示すのは。
「私はさ、確かに変わりたいと言ったけど。物理的に変わりたいとはいってない！これどうするの？私明日の仕事とか、と、トイレとか！ていうか、何で性別を変えた!!」
声を上げると同時に、私渾身の右ストレートがユベルに迫る。身体が変わったせいでいつもより力が少しだけました気がする。ユベルは少し驚いた様子だったけど、すぐに何事もないように拳を頬に受けると、まるで砕けることのない壁を殴ったように自分の拳が激しく傷む。…何それ反則だ。
『何でそんなに怒ってるのかな？元の自分を変えたいなら、これぐらいやらないと。外見を変えて順々に中身を』

「やーりーすーぎ!・やりすぎだよ。物事には順序が有るの。私が仕事しないと私は生活できないの。この姿じゃ、今までの仕事できないの!」
『でも、これぐらい荒療治しないと。むしろ君だとわからないくらいにしたほうが君も再出発しやすいだろう?』
　再出発という言葉に、少しだけ心が揺らいだ。姿を存在を物理的に変えてしまえばあるいは
「…否定はしないけど、これさっきのカードの効果だったらもとに戻せるの?」
　もう一度、あそこに戻れるかもしれない。今まで考えることもなかったその可能性に私は、ユベルに対して浮かべていた怒りが、感情がおさまっていく。
『あくまでもカード効果での変化だから、解除するならそんなに力はいらないよ。また変わるときはごっそりデュエルエナジーが必要だけど』
　あ、戻るんだ。それなら問題な…
『多分』
　まって、ユベル。
『つい、身体が動いたりカードが使えると思うと、柄にもなく浮かれちゃったんだから仕方がないじゃないか』
　ごめんごめんと悪びれずに謝るユベルに私ははぁ…っと小さくため息を漏らす。まあ、仕方がないよね?今まで動けなかったんだし、誰とも話さなかったみたいだし。
　…そう考えると私も一緒か。こうやって、誰かに上っ面でなく話をしたのは久しぶりだった。楽しい、こんな会話ですら楽しいものだったんだ。それに心の毒を出し切ったせいか、デュエルエナジーと一緒にユベルに吸い取られてしまったのか、手紙を呼んだときの暗い感情は綺麗サッパリと消えていた。
「まあ、おきてしまったことは仕方がないか。もし戻らなかったら、もう一度カードを使って元の姿に変わればいいし。それで、今度やるときは私に相談してから。これは私といる時の約束」

『はいはい』
「……あと、私のことは今から陽彩って呼んで」
『ん？君の名前は確か両親が言っていたのを聞いたけど、それじゃあ無かったよね？』
「私の両親の名前から一文字ずつ取ったの。身体がいきなり変わるのは嫌だけど、これは私の決心。私が両親がどうなったか知るって誓ったケジメ…みたいなものかな。ほら、それにこの名前だと性別どちらでも取れるでしょう？」
『名前はその人の本質を表す。確かに変わるというならそういうキッカケはいいかもね。それでさ、両親がどうなったか知るって言ったけど何か宛はあるのかい？因みに僕はない』
　はっきりいう彼がどこか可笑しくて私は笑ってしまう。本当に彼にとって偶然だったのだろう。けれどもその偶然のお陰で私は一つの決心ができた。先程浮かんだ今まで考えないようにしていた可能性。けど、彼と一緒ならもしかしたら行けるかもしれない。
「…デュエルアカデミア、いや私の年だとＤＡＵＳか。そこに行ってみようと思う。あそこの研究施設ならもしかしたらユベルのデータが有るかもしれないし、あそこに通っていればそういった研究者と知り合うキッカケも多いと思う」
『ＤＡＵＳ…ＤＡＵＳか、どこかで聞いた覚えがある。研究所の誰かがそんな単語を言っていた気がする。なら、決まりだ。まずはその研究施設に侵入して機密データを奪い取る』
「いや、待って。話が飛躍しすぎ。私そこまでの技能無いから！」
『じゃあ、どうするんだい？』
　有無を言わさず最短ルートを突き進もうとする彼に動揺するも、なんとか私は誤魔化すすべがないか考える…というよりも、考える前に心のなかでユベルに心を読まないでとお願いもする。いや、心のなかで心を読まないでとお願いするのもどうだとは思うが仕方がない
「ＤＡＵＳは学校だから、普通に入学してはいったほうが怪しまれない。そう、怪しまれない！一度怪しまれて、ユベルだって研究施設に戻るのは嫌でしょ？」

『そうだね…時間が掛かるが仕方がない。待つのには慣れてる。それに今度は退屈しないだろうし。さあ、お互い進む方向も決まったんだ陽彩。とりあえず今日は陽彩のことを聞かせてくれないかな？長い付き合いになるかもしれないし、君が抱えてた闇も気になる。それを僕に見せてくれないか？…まあ、端的に言えば僕のエネルギーみたいなものだ、つまり人間風に言えばご飯かな』
「…なんだか、急に人間臭い言葉を聞いた気がする。まあいいよ、私も何も食べてなかったし。じゃあ、料理を作りながらでもいいなら」
そう言って、私は部屋の中を再度見渡す。我ながらよく散らかしたものだ…。明日、そう明日片付けよう。まずは料理を作らねば。そう思い立ち上がりながらユベルに向けて自分の昔話を語り始めた。
「昔々、デュエルが好きな女の子がいました。」
『もったいぶった言い方だけど、それって陽彩だよね？』
「話の腰を折らない。言っていてなんだけど結構恥ずかしいんだからね！」
はいはいと、返事を返すユベルに私はまた話を続けた。ユベルは時々茶々を入れながらも最後まで私の話を聞いてくれた。そう、これが私とユベルの出会い。私が変わるキッカケをくれたあの日の思い出だ。

アルバイトも終わり、私はスキップでいつもの帰り道を進んでいた。
何でスキップするかって？それは楽しいデュエルがあったから仕方がない。
『ねえ、流石に感謝の気持ちだからって、《友情　ＹＵ―ＪＹＯ》を使いまわして３回も握手する必要はなかったんじゃない？最後さすがの店長も苦笑いだったよ？』

ユベルが話しかけるのは先程のデュエルの内容だ。端的に言えば勝ちました。サーチを使ってデッキ圧縮するタイプの人は私と相性がすごく悪いのだから仕方がない。それにしても
「まさか、《ゲート・ガーディアン》なんて使ってくるなんて思わなかったんだもん。ＵＦＯに乗ってたけど。あんな珍しいものを見せられてしまったら私も全力で答えるしか無いもん」
『…君は本気でお客とデュエルしないほうがいいって言われたね』
途端スキップが止まる。ダメだその言葉は私に効く。
「…いいもん。わかってたもん。でも、店長がユベルを見た時すごく驚いてたね？意外と何か知ってたりして」
『流石にそれはないんじゃないかな？』
「そうだよね～、本当にそうだったら灯台下暗しにも程があるし」
あははと周りから見ればただの一人笑いなのだけど、まあ見ている人もいないので気にせず到着したマンションの階段を駆け上がる。そっと鞄の中を探して鍵を取り出そうとするも。
「ああ、そっか。今日はあの子がいるから隠したんだっけ」
『ん？陽彩ちょっとまって』
「何？ユベルとりあえず、中に入ってから」
『あー…まあ良いか』
何か言いたげなユベルを不思議そうに思いながらも、私はそっと植木鉢の下に隠してある鍵を回収する。そして、いつものように鍵の掛かったままのドアを開け、部屋の中を見る。
うん、いつも通りのカードだらけの部屋、どこか殺風景な家具、そして見覚えのある女の子…ん？ダメだ、止まってはいけない。思考停止は逃げることだ。逃げないって決めたじゃないか！頑張れ陽彩。大丈夫朝もこうだったじゃないか…どうしてこうなった。
「ただいまー。って…なんでいるの？」
私はとりあえず、荷物を置きベットの上に座っていた彼女に声をかける。彼女はと言うと罰が悪そうな顔を浮かべながら
「ああ…えっと、帰るタイミングを逃してしまったというか…」
うん、何のタイミングだろう。いやダメだ。深く考えてはいけな

い。とりあえずもう一度部屋を眺める。何もなくなった様子はないし、物取りと思われたくないために残ったという説もある。というよりも、彼女は帰らなくて平気だったのだろうか？元々一人暮らしか、それとも両親に連絡でもしたのだろうか。

まあ、彼女のことを探ったところで彼女本人が語らなければ何故かなんてわからないわけで…。だけど、これぐらいは言ってもいいだろう。

「あのさ、一応私も…えっと、男だからね！ほら、こう、女子一人が自分の部屋で待ってるなんてことされたら…」

うん、言い慣れないな。そもそもこんな状況になるなんて想像だにしてないし、一生言うつもりがなかったのに。

「そのわりには昨日何も…。」

頑張って絞り出した言葉に彼女は平然と返してくる。諦めてはいけない、そう此処でバシッと言って置かなければ、学園生活を平穏に過ごすことなんてできないはずだ。

「…まあ、今日はアルバイト辞めてきたり、部屋の契約切ったりで疲れてたから手を出さないけど。男は野獣なんだよー！気をつけるんだよー。」

叫ぶように、無理やり声を出す。だけどなんだろう、すごく無様だ。何で強気になれないのだろう。そんな私を見て彼女もどこか可笑しそうに笑っていた。

「なんというか、説得力ないです。」

「…それはそれで私なんだか悲しくなる。」

自分でもわかってるから、言葉にしないでほしかった。

そんな私をじっと見ながら、彼女、司は首を傾げ呟く。

「せめて、一人称は私じゃなくて僕にしてみたら可愛いと思いますよ？」

「…そうかな？でも僕だと被っちゃうからねー。」

『僕は別に気にしないけど。』

間髪入れずに返すユベルはこの状況が可笑しくてたまらないのか、ニコニコと此方を笑いながら見ている気がする。ああ、恥ずかしい。

「…誰にですか？」
「えっと、私の親友でパートナーかな。」
ふむふむと、やはり彼女は探るように私を見ている気がする。何で？そういえば、彼女は私が返ってくる間何をしていたのだろう。
「…何で、じっとこっちを見るのかなー」
「ああ、いえ。なにもないですよ。そういえば、泊めてもらったお礼少し部屋を片付けておこうと思いまして、今日少しだけこの部屋を掃除したんですよ」
掃除？あ、嫌な予感がする…というよりも非常にまずくないかな？
「そういえば、風邪か何か引かれたのですか？声の調子が昨日と違いますよ？」
言われて気づく。そういえば、私今日アルバイトに行くのに元の姿に戻っていた…
「ねえ、藍沢さん。」
「何かなー。」
いや、喉仏は隠れてるし大丈夫。寒かったから厚着はしていたし、服装は…変身を途中で解除しても良いようにどっちでも取れるのを着ていた。言葉とは裏腹に、私の頭の中は焦り出いっぱいだ。まだ、大丈夫致命的なことはしていないはずだ…そう、その瞬間まで思っていた
「…えい！」
司が、ぐいっと自分の胸にふいに両手で触れてくるまでは
「あ…って、何するのさ！」
思わず声を上げ、後ろに後ずさり、胸を両手で抑える。手が出なかったのは相手が女性だからだろう。というよりも、今までこんなにアクティブにこんなことをされたことはなかったから不意に体が動かなかったとも言える。だって、私は
「無い、いやありますね…」
そう、世間一般で言う貧乳だったから。
無いっと言われてよしっと思った自分が少しだけ悲しくなった。だけどブラには触れられてしまって、彼女はそれで確信を持ったのだ

ろう、此方に詰め寄るようにその顔には笑みを浮かべて私のもとに迫ってくる。
「ねえ、藍沢さん。もう言い逃れはできませんよー。貴女、何者です？」
「あ～…それ、言わないと駄目？」
「性別を偽ったら流石にＤＡＵＳの入学は難しいと思いますよ？」
これは俗に言う脅しだろうか…。はぁ、どうやって説明したものか。
ねえ、私の中で笑ってるユベルさん？貴方もさり気なくピンチなんですよ？
私はどうやって彼女の質問を誤魔化そうかと頭をひねるのであった。